

特 11

623

金澤龍玉著作

演劇
脚本

傾城品評林

自大序
至大詰

特11
623

演劇本 傾城品評林

場割

大序 佐々木家演館の場

二幕目 佐々木館の場

三幕目 芝居又平山の場

四幕目 朝顔庵山三住居の場

大詰 大上門口殺しの場



演劇 傾城品評林

大 序 佐々木家演館の場

役名	名	一	二	三	四	五	六	七	八
一名 古屋山	三	一笹	野	蟹	藏				
不破伴左衛門		一土	子	泥	助				
一名 古屋山左衛門		一秘		關	屋				
一此 村常陸之助		一同	野	分					
一綾 の 臺		一同	明	石					
一妹 お 柳		一同	若	菜					
一佐々木桂之助		一同	常	夏					
一白 拍子藤浪		一佐	々	頁	三	八			
一不 破 道 犬		一侍		大	勢				
一犬 上 雁 八		一小	姓	二	人				
一矢 橋 兵 藤		一上	下	侍	四	人			
一岩 倉 軍 藏		一供	廻	り	大	勢			

遺物通り二重舞臺金襴襦袢間半御簾をかけ上手御簾家体二重上手に綾の臺衣装襦袢次に此村常陸之助衣装上下後に秘關屋野分並び燭臺數多燈し平舞臺上手に不破伴左衛門次に不破道犬衣装上下手に名古屋山左衛門名古屋山三衣装上下伴左衛門山三は両方にて詰掛て居る早舞ばた〜にて道具納る 伴左衛門此役目是非某が相勤める 山三「イヤ、ヤ拙者が勤めて見せよ」伴左衛門「手前が山三かんでもない事 二人何を小癪な 道犬綾の臺様といひ上使の御前立願いで尾籠千万 常陸之助」双方共に鎮まり召れ 伴山「ハッ〜」ト叩へる」綾の臺そも此千鳥の香爐は先年石川左右衛門といふ盜賊奪取り去より行衛知れず然るに當國七本柳の沖に當り夜毎に光り物し月代上ると齊しく千鳥群啼くとの事察する所右の名器水中に沈みある疑ひなし尋ね出し差上なば當家の大功 昔今日立越しは久次公御懇望有る白拍子藤浪急ぎ差上らるべきとの嚴命 山左衛門御上意の趣山左衛門得と申聞けお錠の返答致させ升せう 道「イヤ山左衛門其女にうつゝをぬかす桂之助餘も承引は致すまい 綾娘銀杏の前は桂之助へ御上意は其の縁組今又於て興入なきは其白拍子の色香に迷ふての事ならん 山左「コハ存じ寄らぬ仰せ曾て左様成る義は 綾左様でなくばたらはぬ姫故嫌ふての事有う 山」全く左様ではムらね共娶る時は父母に告ると父六角定頼は異國征伐にて在國致さず延引せしは父への禮讓 伴「附人たる貴殿御親子辨舌を工みにして言ひくろめんと思はれても

悪事千里若殿の不行跡 山「イヤ、伴左衛門殿御前でムるお扣へ被成い 伴「お身持が悪いから悪いといつたが誤りでムるか 山「イヤサ家來の身で主家の非を上るは 兼「山三殿扣へさつしやれ 山「ハッ 兼「太切成る御造營の役目蒙り乍ら九條の廓で過分の奢り御上聞に達してムるぞ 山左「桃山御殿造營の太切の役目に暇なき繁多の身の上跡方もさき世のさがしら 兼「然らば白拍子を殿下へ差上 兼「姫と婚禮さへ取急げば世の取汰沙も消る道理 兼「マテ桂之助殿には何故對面致されぬ 道「今に於て歸館さきハ附人たる山三が落度 山「イヤ若殿には俄の不快暫時の不禮眞平御高免被下升せう 伴「イヤ伴左衛門は吞込ぬ「ト内にて桂之助、佐々木桂之助定國夫へ参り御對面仕らん「ト正面襖を開くと桂之助衣装上下にて生醉跡より白拍子藤浪付出る 秘明石秘若菜出て扣へる 兼「山三折角樂しまうと思ふて居るをようだましたな 山「アイヤ若殿御前でムり升 桂「御兩所様には御苦勞の御入來鹿酒一献召上られ升せい 道「若殿おたが放埒ゆへお咎めの條々性根を定めて返答召れ 山左「其義は主人に成替り此山左衛門がお受申す○姫君お興入の取急さまつた藤浪義は御説に任せ差上升せうす間御前宜敷お執成の義を 桂「コリヤ山左衛門藤浪をどこへやるのじやわしは不得心じやぞ 山左「イヤ若殿御前でムる何事も某お御任せ有てお扣へられ升せう「ト吞込すこなし」 道「何をいつても白拍子に魂を奪はれ心愛にあるざる身持此上は一刻も早く右

の香爐尋出し升せうす間何卒夫を功に大殿御歸國有る迄當家の預り某へ仰付られ下さり升せうならば 山左「道大殿貴殿預り召れす共若殿を守立名君と致してお目に掛升れば御心遣ひは御無用でムる 道「ハ、ハ、左様思ふならなせ今迄に御諫言を申過ちを改めさつしやれぬ何にもせよ附人たるうこ元の誤ではあるまいか 山左「サ夫は 道「なんとでムる 兼「親人のいはつしやる通り附人の身の行ひが悪いゆへ自然と若殿の御放埒何は格別香爐は尋出し差上れば御賢慮安く思召れ升せう 山「イヤ望み掛つた其役目は非某が申受る 伴「是サ山三水中を吟味杯とは六ヶ敷太切成る香爐を取上る役目は貴殿何として、夫とも武藝は元より水練も鍛練で居さつしやるか 山「お望みならばお目に掛升せう 伴「イヤ武士道一通り心掛けうと存ずれど打離子や女原に心をとるかす性根ではそりや叶はぬ事だ 山三「御前とも憚らず様々のたと言女原に性根を乱る山三でムらぬ 伴「ハア、只今申たが氣にさつたらゆるさつしやれスリヤ女原には心をよせぬといはつしやるか 山「いかにも 伴「其又心を寄せぬ者が此艶書は「ト券を出す 山「イヤ其みは 伴「山三様参る嵐になびく柳より「ト藤浪恠り」 伴「何と是でも女に心を寄せぬのか斯ういふ性根で太切成る役目を望むは片腹痛し附人の身の行ひが悪いといふは愛の事でムる○ナニ藤浪うちが妹お柳は山三と不義を働らいて居るぞよ武家に禁する不義の大罪○サア山三見事是にも言譯有るかアノ愛を偽り

者めが「ト蹴飛す山左衛門山三を引付」山左「ヤイ悴め若殿に附添ひ居乍ら不義の汚名猥成る性根にてはなかりしがアノ愛を不所存者めが」山「成程御怒りはさる事なれ共此身に於て毛頭覺へは」件「是程慥な證據あるに覺へないとはいはれまい」桂「本にわれも意地の悪いモウよい加減に置けいやい」件「假令山三の科は遁れてもお柳が不義は遁れまい」藤「妹柳が山三様を口説を科と有てお仕置に合升れば件左衛門さんあなたも仕置にお成りなさるにや成升せぬぞへ」件「何と」藤「是迄私を度々口説かしやんまな件左衛門さん」ト桂之助「悔り」件「コリヤ」藤「藤浪親人も是にふるそちを口説た杯とはア、コリヤ妹が命を助けん爲に言かけなぞか」藤「エ、アノまざくしい殿様のお耳へ入つたらお身の上と隠して上たが腹が立エ、あなたはのう」桂「ヤア」本間に我身を口説たかエ、憎いやつじやなア」件「イ、ヤ件左衛門覺へないぞ」山左「イヤ覺へないとはいはれまい」件「何と」ト山左衛門狀を出し」山左「松にかゝれる藤浪様參る不破の關より」件「ヤア夫を」ト取うとするを持かへ」山左「當家に於て不破と名乗るは貴殿親子開封して讀み上升せうか」件「サ夫は」件「山左」サア」山左「何と」ト件左衛門ムウトこなし」桂「エ、聞ば聞程憎いやつおれが寵愛の藤浪を」コリヤ」山三「あいつをくらはして呉れ」山「エ、桂」ハテ何にも遠慮する事はない」○猶豫するはそちや主の言付け背くか」山「イヤ全く以て」桂「左様で早く打てやい」山「ハッ」ト立上り

件左衛門を引付扇よて」山「御意じやく」ト打つ」桂「エ、扇では腹がいぬ草履でぶて」山「ハッ」ト草履を取つて」山「御意じやく」ト打つ」桂「ア、夫でちつと腹かい」た」道「ヤイ悴めうぬが不所存故身が武士を捨さする此上は親子の縁も是限りどつと」出てうせう」ト件左衛門花道へ行かけ持て居る草履を見て無念のこゝろし」件「待ておれ」ト向ふへ這入る」道「ハテ不所存な悴め」イヤ御両所には先程より無御退屈」山左「様々の儀をお聞に達し恐入升てムり升る」桂「家中の善悪は主人の耻辱政道を嚴に申付てよからう」山左「畏つてムり升る」當藤浪を差上べき義は桂之助にも彌承知でムらうの」桂「イヤ」此事斗りは不承知でムり升る」山左「アイヤ若殿御不承知とあればお家の瑕疵でムり升るぞ」桂「夫じやといふて」山左「ハテ何事も某にお任せ有るがお家のお爲先づあなたには御両所斐應の御用意」桂「サアろりや合点じやが藤浪の事はよいかやそんなら藤浪」○御両所様後刻御意得升せう」ト桂之助藤浪を連秘付添ひ奥へ這入る」道「山左衛門殿只今の様子では藤浪と差上られまい貴殿斗り吞込で道犬一圓合点參らぬ」山左「甲が砂利に成ても若殿をお諫め申藤浪殿は差上る」道「イヤ其請合は心元ない」ト侍一人走り出て」侍「ハッ申上る早打と相見へ乗物一挺御門前へ駈付升てムり升る」ト言捨這入る」山「進、早打とは心元ない」山左「御両所暫らく御宥免」桂「遠慮に及ばぬ」當是へ」山左「藥湯の用意」内にて」ハア、」ト小姓二人

銀の茶碗を持ち上下侍四人付添出る」向ふより「エイ／＼／＼」ト下斗りの侍白の禪鉢巻股立を取り乗物に木綿の綱を付引ばり出る乗物は両方の戸をはづし中に佐々良三八着付麻上下上を脱ぎかけ白木綿鉢巻腹帯にて刀にすがり下斗りの侍股立を取り右の人数十人斗り禪鉢巻にて乗物をかき掛聲に合し出て来り直ぐに本舞臺へおるぞ」山左「ソレ介抱／＼」侍「ハッ」ト立掛り三八を乗物より出す山左衛門印籠を出し薬杯吞せて差圖宜しく侍立掛つて」山左「綾の臺様お入といひ御上使様の御前なるぞ」皆々「佐々良三八」山左「心を儲に」ト三八一口吞であたりを詠め」三八「綾の臺様常陸之助様ハッ／＼」○本城迄と張詰し釣緒何れも是に御入りと聞き思はず悶絶 綾「思ひ寄らざる早打は 常定頼殿のお身の上 山左「軍の次第は 道凶事か吉事か 山「ソレ様子は 皆々「なんど／＼」 三「ハッ先達て渡海なす加藤小西が先鋒に定頼公の手勢を交へ慶州忠州の城を攻め大同江を遠攻に心をゆるす諸將の不覺思ひ寄らざる闇夜の夜討 山左「ソレ御主人のお身の上は 三「コハ口惜しと定頼公眞一文字に突入り采配取て下知し給ふ思ひ掛けなき流矢にて既に御落馬有るべき所漸々陣所へ御供せしが其場に於て御落命 道「スリヤ定頼公よは 山「御逝去とぞ 皆々「ヤ、ヤ、ヤ、」ト大恸り」 三「御主君の弔軍と家臣の面々必死の働き當るを幸ひ討取突伏めく迄戦ひ其場にて思ひ／＼に討死遂げ某一人歸國なせしも此義を知らせ申さん爲イテ御主人に追付て死出三途の御案内何れもか去らば」ト腹切らうとする」 山「コリヤ早まるな 三「イ、ヤお放し被成て主人の殉死

山左「ニリヤ犬死するか 三「何犬死とは 山左「今其方が腹切ては忠義に成るまい／＼」 三「何と御意被成升る 山左「興廢二つにかゝはる大事若殿の御先途も見届けず追腹杯とは無益の犬死 三「スリヤ追腹も叶はぬとなチエ、、、 道「大殿の逝去は悔んで返らずお家の跡目定る迄は此家國の道犬が預り 山左「イヤ／＼道犬殿若殿を差置てうこ元が預るとは此の山左衛門は吞込ぬ 道「放捨なお身持ゆへ御本心を見届け置は若殿のお爲を存じての事さ 常道犬が願ひもさる事なれ共上意の縁邊打捨有る上定頼不覺の戦死と有れば當家相續の儀は叶ふまい 山左「道「スリヤ跡目の願ひも 常何ともはや 山左「山「ホイ 道「ムウ 山左衛門家國を無難に治る功を立ちや○水中に沈み有る千鳥の香爐尋ね出さば其功を以て跡目の願ひは關白殿下を申なだむる自が情の計らひ 山左「コハ有難御賢慮時日に移さず右の名器尋ね出し差上せう 綾「早速の承引自も満足 三「イヤ山左衛門殿大切をる千鳥の香爐水中より取上げの役目拙者に仰付られ下さり升せうならば 道「コリヤ／＼三八身に分際も辨へず叶はぬ願ひだ扣へておらう」ト三八むつとすることなし」 山左「アイヤ三八其方の誠心を見抜申附る用事もあれど○イヤヤ夫は追て遠路の法進勞れしならん暫時次にて休足しやれ 三「ハイ」ト心の濟ぬこなし」 山左「ハテ其方か武士道は山左衛門が立さしくれん 三「ハ

イ左様なれば 山左「行きやれ 三」ハッ「ト橋掛りへ這入る」 山「親人此役目は矢張り某へ
 山左「量り知らぬ湖水の水底そち一人にては存じもよらず千鳥集る所を伺ひ多勢を以て探
 り見ば取得ぬ事は餘もあるまい 綾成程多勢の力をからずんば容易に實は取得られぬ 山左
 「月代ろは丑の下刻一家中へ觸渡し支度申附てよからう 山「畏つてムリ升 三」シテ藤浪の
 返答は 山左「是非とも吉左右申上ん 綾さうして姫の身の上は 山左「吉日を撰み御輿入を
 取急ぎ升る 山「暫時奥にて御休息 常藤浪の身の納りが 山左「取りも直さず當家の納り 三」
 家國を預るか 山「跡目首尾よう調ふか 綾「量り難き湖水の手柄 三」善悪二ツは 山左「今宵
 の内に 三」山左衛門殿 山「御両所様 綾「返事を奥にて 三」相待申 山左「道、山「先づ入らせら
 れ升せう「ト綾の臺常陸之助道犬山三奥へ這入る」 山左「綾の臺のお情にて香爐だに取上げ
 なば夫を功に若殿へ御家督相續のお願ひ〇兎に角心得難きは不破道犬お家を望む工みとは
 見て居れど是ぞといふ証據もなしお家を無難に治る思案はムウ 三」仇に散せし花ならば落
 ちては水のあとこれといハザ白浪のあだし身は果敢なき程を羨まれ 山左「藤浪を差上んと請
 合しは何角の願ひの首尾せん爲若殿にお勤め申若し御承引なき時は 三」露と霞をあはれみ
 歎く末の柵み誰か知る「ト思案のこなま下手より三八伺ひ出」 三」山左衛門殿 山左「三八
 三」大殿御他界と申藤浪殿差上げよとある八次公の御難題先刻のお示しの一言憚乍ら御覽
 慮の程「ト床の間にある一軸を取て来て」 三」此一軸が御返答の極意で「ト差出す」 山左「ム
 ウコリヤ大道國師の印されし雪の一字 三」此一字が其元様の御本心某が忠義の魂若殿様の
 御安泰祈るべき一計は此一字より外にはムらぬ 山左「ムウ此一字をゆきと讀めい 三」雪は
 鷲毛に似て貴人の心を慰むる暫時の一興 山左「若し又すゝくと訓すれば 三」水よ縁ありた
 へせぬ流れ 山左「其源は雨霰雪や氷と隔つれど 三」解ては永きお家の榮へ 山左「遮れ明察
 ろちが判断 三」其元様の御本心と 山左「符節を合す 三」互ひの胸中 山左「手段の施す 三」
 今宵の切羽 山左「コリヤ密かに」「ト傍りへこなし」 山左「スリヤ某に成り替り 三」仕か
 いせてお目に掛け升せう 山左「出かした」ト顔にて行けとする三八ハット俯向く山左衛門
 は奥へ三八は橋掛りへ這入る下手より道犬兵藤軍藏を連出て来る」 兵藤「道犬様 道犬「コリ
 ヤ〇悴伴左衛門出行しは大望火急に叶へん存念 兵「彼千鳥の香爐を先へ走せ行奪取るが何
 より近道 三」軍藏「夫を功に當家を預るお願ひあるが大望の手始め 道「其義は雁八泥助蟹藏へ
 申合せ置たれば其方兩人は伴左衛門に逢ひ此趣を申聞せよ 兵「軍「心得升た 道「行きやれ
 兵「軍「ハッ「ト橋掛りへ這入る」 道「是でよし」ト下手へ這入る奥より藤浪出て」 藤浪「久次様
 の無体の仰せお請け被成た山左衛門の深い御思案心ならぬ今宵の時宜本に辛氣な事ではあ
 るわいなア」ト上手御簾家体の内にて」 綾「瀧浪の花散る袖の濡つゝも折てや見まじ春の藤

ケ枝「ト御儀巻上る内に綾の臺榭に坐り葎盆扣へ居る」藤「ヤアあなたは綾の臺榭 藤」藤浪
 近う藤「ハイ」ト傍へ行き」藤「御用でムリ升るか 綾「彌ろなたは久次に随ふてたもる所存
 か藤「エ、綾「サ、心には染まいけれど自らが分ての頼み佐々木の家名も積り万民の歎き
 を救ふもそなたの思案より外にない誰あろう久吉の妻の自が道ならぬ無体を勤むるも天下
 の爲桂之助が家の爲聞届けてたものう○無体を頼むもなさぬ中の久次殿其義理を思ひゆ
 るのせに育てしは妾が誤り妾目かけ三十餘人の其上に藤浪こそは美人の聞へ差出せよとの
 我儘もどうぞ心に随はせ諫めを入れて本心に立歸らさん我存念どうぞ聞届けて被下いのう
 「ト藤浪始終泣て居る」綾「何をいふも皆自らが得手勝手此上久次が悪行募り父君へ聞へな
 ば悔んで返らぬ由々敷大事義理ある久次が非業の最期まざく」と見んより兼ての覺悟さう
 じや」ト自害せうとする藤浪胸り山左衛門出掛け居て止め」山左衛門「コハ御短慮の御振舞先
 づ／＼御止まり被下升せう 綾「ヤア山左衛門耻かしき此身の懺悔 山左「ハ、ア適れ節なる
 お志し先づ／＼」ト懐籠取て」山左「此上は是非藤浪に得心致させ聚樂御殿へ差上れば御
 生害には及び升まい 綾「スリヤ眞實藤浪と 山左「天下の爲家の爲得心致させて差上る藤
 申し夫では 山左「ハテ一國の政事を預る山左衛門女童の知る事ならず其方の奥殿へ参り若
 殿の御介抱 藤「ハイ 山左「ハテ扱行きやれといふに 藤「ハイ」ト奥へ這入る」 山左「某承知
 仕れば先づ／＼お任せあられ升せう 綾「エ、嬉しうもる 山左「附ては某も一ツのお願ひ吉
 日を選び桂之助銀杏の前様首尾よく婚禮取結び升れば何卒化粧料たる一万町の御朱印此場
 に於て下し置れ升せうならばこや婚禮調ひしも同然此義偏に願ひ奉り升る 綾「尤の願ひ足
 はぬ姫を頼みのゑるし」ト袋入の朱印を出し」綾「サア受納しや 山左「ハ、有難く頂戴仕つ
 てムリ升る」ト九つの鐘鳴る」内にて「水馬の刻限 大勢、ハア、」ト橋掛りより山三跡より犬
 上雁八土子泥助笹野蟹藏出て來り」三入「山左衛門殿 山三「直様是より 雁八「七本柳へ 皆々、
 馳向はん 山左「心を盡し寶の詮議 綾「吉左右を待て居るぞや 四人「ハア、 山左「早く／＼
 山「何れもムれ／＼」ト皆々向ふへ走り這入る」綾「三更とあらば最早歸館を仕升せうわいの
 山左「スリヤ御前には御歸館とな○お供揃へ 内にて「ハア、 綾「明朝迄に何角の吉左右 山左「
 事なく寶を取上て藤浪諸共聚樂の御所へ某附添参上致せば御前宜しく御執成し偏に願奉る
 「ト女乗物供廻り大勢出て來る常陸之助出て來り」常陸之助「我君には御歸館とな 綾「くれ
 ぐ／＼も姫が身の上 山左「松の齡の色かへぬ 綾「末陸まじう家の榮へ 山左「其義を偏に願ひ奉
 る 常「シテ寶の詮議藤浪の身の上はな 山左「何事も明朝迄に 常「御返答を 綾「待て居るぞ
 や 山左「長つてムリ升 常「然らば我君 綾「山左衛門 山左「某もお見送り 常「か立ち 供廻り、
 ハア、」ト綾の臺乗物に乗り供廻り美々敷跡より常陸之助山左衛門附添向ふへ這入る返し

造物右の二重舞臺下手へ引き高欄附の廊下段々出て来る三八尻からげ覆面頭巾にて傘をすぼめさし出て来り柴垣へ忍ふ上手より野分關屋手燭を持出て来り 關屋「なんと野分殿暗い夜さりではないかいのう 野分「サいのう高欄へ寄り掛り怪我せぬ様に用心しやヤ 關「うりや合点じやサア行かしやんせ」ト三八伺ひ寄りさうでないといふこなしにて柴垣へ忍ぶと兩人下手へ這入る跡より若菜明石常夏手燭を持出て来り「若菜「今宵は思ひの外夜が更たノウ明石殿 明石「思ひ掛ない綾の臺様のお入り久次様の御無体な仰せ 常夏「藤浪様も嘸氣がもめるであらうぞいのう 若「どの様にいふても若殿が久次様へ何のおやり被成れうぞいのう 明「此様な事いふて居ようより早うこちらは休まう 三人「さうせうわいのう」ト三八伺ひ又柴垣へ忍ぶ藤浪手燭を灯し出て来り「藤浪「物のあはるも分け兼ねる今宵の暗さ殊に烈き風音ぞうやら心細い〇氣に掛るはけふの様子本に儘ならぬ浮世じやサア」ト下手へ行掛ける三八横の段より上り伺ひ寄つて切附る藤浪逃げうとする裾をふまへて一かせ切附る藤浪倒れ乍ら手燭を突附る三八切拂ふ手燭消へ暗がりの模様藤浪聲を立てやうとしても聲の出ぬこなしにて下手へ逃る是なりに廊下上へ引く立廻り色々あつて藤浪を殺し止めを刺し三八廊下先の手水鉢にて刀を洗ふかりう下手より手燭を灯し出て三八を藤浪と思ふこなしにて」ト「姉さん〇ヤア三八殿」トいふを刀にて手燭を切落すかりうソレと寄るを一寸

當て廊下を飛かりると雨車大どろ／＼雷の音三八傘を探り持て花道へ行掛るとバツと掛廻り確立ち焼耐火にて藤浪の死骸すつくりと立ち三八連理引にてたぢ／＼と本舞臺へ戻る」ト「憎めしい三八殿何故此身を亦の錆生さ替り死に替り恨みを晴らさいで置うか」ト惱ます三八刀にて切拂ひ花道へ行掛ると又引戻す三八傘を持乍らとんと下に居て藤浪が顔を急度見上る此とたんにて舞臺先へ銀の糸雨ばらりとおりる大どろ／＼にて宜敷浪幕を引く造物浪幕ぞんちやん打込跡一セいに成り向ふより雁八好みの形り浮腹巻馬上にて馬には浮沓を付け鞭を差し熊手をかい込片手に松明を照し跡より泥助蟹藏同じ拵へ熊手松明を携へ馬上腰繩にて出て 雁八「何れも七本柳より一里餘り沖に當つて光り物を目當に乗込み香爐を取上げ其功を言立て佐々木家の預りは願ひの通り道犬殿左すれば兼ての大望も追附成就 蟹藏「山三めを出し抜き香爐は此方へ取上げ自滅さす計畧 泥助「夫よりは湖中に於て取囲み討取が何より近道 雁「如何様是も妙計」ト山三同様の形り馬上にて駈来る」三人「ヤア山三殿 山三「何れも御苦勞に存する 雁「貴殿存の外早い出馬 泥「遅うてもよくムるに 雁「ハハよい〇手番ひでムるなア 山三「シテ此濱邊より乗入り召さるか 蟹「イヤ我々は七本柳より 雁「イヤ／＼七本柳と深田故馬の足が立升せぬ矢張り榎の木の間洞より 泥「雁八そりや大きな廻り道 雁「ハテ扱彼の灣洞は倔強の場所か」ト呑込し」 雁「夫故彼所より乗込うと存る

蟹「如何様夫がよからう 山「然らば某も榎の木の灣洞より乗込み升せう 雁「そこ元は馬上の
達者先づ乗込み召れ 山「瀬踏みの致さん方々ムれ」ト引返し這入る」 雁「さやつを出し抜き
七本柳を眞一文字に 蟹「先乗御免 雁「ムれ」ト皆々引返すぞんちやんの中へ一セイ打込み
返し

造物右の浪幕靜に段々紋板迄引附る此内舞臺前花道兩側に浪手摺をせり上る浪幕は段々せ
り下げ二の手に成ると一セイに成り伴左衛門馬上好みの拵へ松明を持腰繩鞭打向ふより出
る引續いて山三出て 山三「某より先へ乗入りしは心得ぬ」ト伴左衛門に追附」 伴「ヤアそち
や山三 山三「伴左衛門扱は香爐を奪へん工みであらうがな 伴「如何にも身が手柄にする其
上最前の返報覺悟せよ」ト松明を捨て切て掛る山三熊手にて馬上水中の立廻り色々あつて
山三熊手にて刀を叩き落す伴左衛門逃うとするを熊手にて引戻し少し揉合ひ伴左衛門を水
中へ投込む」 山三「邪魔の拂ふたソレ」ト橋掛りへ泳がせ這入ると向ふより雁八泥助蟹蔵泳
がせ出て橋掛りへ乗り込む

造物正面遠見の浪の背割上手に大きな岩此傍に伴左衛門山三熊手を持立て居る此見得コ
イヤにて二の手迄突出す道具留る」ト伴左衛門山三熊手にて水中を探る跡より雁八泥助
蟹蔵も出て皆々熊手で香爐を奪ねト山三の熊手に帛紗に包みし香爐引掛け上る雁八夫に

手を掛け伴左衛門岩の上より熊手を引掛奪ひ合ト伴左衛門水中へ飛込む是より雁八泥助
蟹蔵山三が持し香爐に手を掛け帛紗斗り引取り香爐の山三が手に残る此時月代上り大どろ
くにて香爐の上へ千鳥群り色々奪合ひ山三香爐を引取り橋掛りへ走せ込むと千鳥も附て
這入る皆々追駆け這入る伴左衛門浮み岩の上より水を吹く大どろく千鳥笛にて千鳥橋
掛りより山三諸共に二の手へ出る伴左衛門岩の上より山三が首筋へ熊手引掛け宜敷あつて
山三熊手を切折る熊手は首筋に残り夫なりに花道へ行く千鳥附添ひ千鳥笛喧しく山三千
鳥と共に向ふへ這入る伴左衛門は熊手の柄を握ると下に居て右の岩をかい込み向ふを急
度見込み宜敷拍子幕

二幕目 佐々木館の場

役名

一花	形丸	一非	人の三
一倅	長松	一唐	崎團左衛門
一聳	與太郎	一梅	田甚助
一町人	權右衛門	一神	職齋宮
一奴	軍助	一腰	元空輝

一腰	元野分	一町	人長兵衛
一堅	田軍兵衛	一同	治左衛門
一腰	元明石	一腰	元早月
一同	若業	一長	谷部雲六
一同	關屋	一茶	道珍慶
一大	溝丹治	一笹	野蟹藏
一佐々木藏人		一土	子泥助
一名古屋山三		一百姓	太治兵衛
一仲間鹿藏		一女	房お澤
一佐々木桂之助		一不	破伴左衛門
一仲間猿治郎		一千	島冠者
一銀杏の前		實は周防軍太	
一奴岡平		一三	八女房磯業
一傾城浮橋		一狩	野歌之助
一名古屋山左衛門		一乘	物一挺

一不	破道犬	一組	子大勢
一草	津新吾	一家	來大勢
一矢	橋兵藤		
一粟	津藤太夫		

造物見附黒幕板松幕の内より奴岡平泥助と狀箱を奪合ひ居る見得本釣鐘ばたくにて幕明く 岡平「怪しい狀箱こつちへ渡せ 泥助」何を小癪なト立廻て泥助狀箱を引たくり岡平追駈兩人這入る返し

造物通りの二重見附雨紙襖蹴込式臺橋掛り屋敷扉右二重と道犬及び兵藤團左衛門藤太夫軍兵衛並び居る四つの時計にて道具納る 四人「道犬様 道犬」ヤレ靜にく。兵藤「斯申矢橋兵藤を始として土子泥助犬上雁八或は長谷部雲六なんぞ 團左衛門「我々共に至る迄 兵藤」御企に一味合体 道「元來我不破の家筋は梶原の末葉我若年の砌り浪々なまて當家へ仕官道犬は手を空しく老衰に及べ共何卒伴左衛門は世に出さんと思ふより當城を奪はん企て 藤御指圖に任せ長谷部雲六當家の重寶百蟹の巻物を奪ひ取て其場を逐電 道「まづた銀杏の前が化粧料の御朱印も盗み取つたれば追付佐々木家滅亡の基ひ 軍兵衛「何角に付て邪魔になる山左衛門親子の者 道「則朱印の盜賊を山三めが科にする其計畧も泥助めに言付たれば仕お

するは案の内弟の花形丸ひねり殺すは最易し 兵藏人めは土はせりに育たれば仕舞て取るに何の手間隙 藤馬鹿者なれど桂之助は譜代恩顧の叔原が付添ふて居れば油断ならず 道其儀も謀をかけ置たれば手を滯さず自滅は必定今宵の内々何角の手番ひ 兵事首尾よく成就せば 四人「我々迄も立身出世 道」コトヤ 橋掛りより「名古屋山左衛門出仕」ト四人平舞臺へ下る橋掛りより花形丸腰衣の子僧 一人次に山左衛門出る 道是は思ひ掛なき花形君 山左衛門「道犬殿には早々の出仕 道」お互に 山左「道」御苦勞千萬に存升る「ト花形二重の眞中道犬上の方山左衛門下の方四人の侍は平舞臺東西へ並ぶ」山左「ナ」各若殿桂之助様の御病体は 國相變らさうつらくと 兵藤「正体もなき御有様 道」御父君定頼公は大領久吉の幕下に列り武勇烈しきには似も付す女に迷ひ藤浪が最期を悲しみ狂氣の体 山左「御妾腹の弟君花形丸様には先君の御遺言故三井寺に於て御剃髮 花形丸」如法妙門と法名し一旦佛門に入し我なれば出家堅固に先祖の教養 山左「先君外借腹の御惣領定綱君御幼少より御出國ましまして城州宇治に百姓の手業を營み御座有りしを館へ伴ひ跡目相續 道」桂之助の爲にこ兄君されば聚樂の御沙汰記録所の差圖に因て表向は御養子分 山左「何は格別道犬殿三八が有家相知れ升たか 道」彼が女房磯菜を召取り拷問に掛くれども白狀致さぬしふとい女め 山左「ハテ通れ○イヤ憎い女め此上は身共が代り拷問にかけ速に白狀致させん 道」スロヤ貴

殿が○ハテナア 花形「道犬早う兄上の御前へ案内致せ 道」委細承知仕る 花「山左衛門後に逢はうぞよ 山左」ハッ 道「若君には先 曾々」か入りあられ升せう「ト花形丸先に皆々奥へ這入る」山左「ヤア」囚人の女はへ引け 下部「ハア、」ト山左衛門傍りを見て錫の鉢を取て筒の水を受け前に置く磯菜腰繩にて下部付添ひ出て」下部「下にからう 山左」佐々良三八が女房磯菜此程の責苦難苦しからうな 磯「御推量遊ばして下さり升せ 山左」先月廿五日の夜御濱御殿に於てうちが夫ト三八藤浪を害し逐電せしよ因て其方を召捕り三八が行衛を詮議すれども存せぬよし夫故湯水一滴も與へざれば生ながらの是餓鬼道サ苦敷ば三八が在家を白狀せよ 磯「忠義に不忠を替へたる夫ト假令有家を存た逆何の白狀致升せう元より知らぬ事なれば申上様はムり升せぬわいなア 山左」ハテ適の魂「ト鉢水を差出し」 山左「女水が呑度いか」ト磯菜飛附て呑うとする」下部「下に居らう」トむがう引据へる磯菜目を廻す」 山「其方共は獄屋に於て責道具の用意致せ」ト下部橋掛りへ這入る山左衛門磯菜を引起し印籠の氣附を飲し羽がひ締を解き」 山左「女心を附よ」ト磯菜心附鉢水を一呑に呑み」 磯「ア、嬉しや 山左」性根が附たか」ト磯菜繩の解あるを見て」 磯「是は 山左」コトヤ○今日道犬に代り拷問とは偽り汝に頼度さ一大事あり 磯「責殺さるゝ命をば御助下さる御恩報じ仮令如何様な御用なりとも 山左」其子細といふは○桂之助様の御病氣是を治する良薬は」ト叫く

銀「スリヤ殿様に 山左「御平癒あらばどちが大功 銀「夫トの忠義を受繼ぎて 山左「必ずしも
に「ト又叫く兩人宜敷返し

燈物三間二重前側一面塗骨障子東西少し小高き障子家体前植込柴垣のあしらひ舞臺前山吹
金銀の蝶桂之助羽織の片肩を脱かけ扇を持立て居る茶道珍慶蒔繪の煙草盆を持ち附添ひ居
る胡弓入りの唄にて道具留る 唄「さいす鳴く野邊の若柳摘拾られて餘所の嫁菜といつか扱
こがれてがる、苦界の船の寄るべ定めぬ身は陽炎の「ト桂之助蝶に戯むる、こなしあつて
竹床机へ腰を掛る障子引抜く見附金襴真中奥深に寶藏の書割机帳を飾り二重真中に銀杏の
前住居前に双六盤を直し此上に鍵を載せ傍に香盒香爐を置きぶら／＼眠て居る五人の腰元
並ひ居る」空蟬「申姫君様 關屋「銀杏の前様お目 五人「覺され升せう「ト銀杏の前悔りして」
銀杏の前「チ、大きな聲をして自を悔りさしやるわいの 早月「夫れでも端近でお居眠り遊ばし
ては 關屋「ひよつとお風杯召升せうかと夫故の事で 五人「ムり升わいなア 銀「イヤ／＼」
家中下々迄自が事をぬくひ人じやといふさうな暖かけりや風引ぬ理屈ではないかいの 關
「イエ／＼あなた様の事を下々では物ぐさ様／＼と申升 銀「物ぐさいとは何の事じやぞいの
關「物ぐさいと申升るは○チ、ソレ／＼お賢いと申事でムり升 銀「そんなら自が賢い故物ぐ
さいといふかやコリヤさうありさうな事じや 明石「御尤でムり升る 銀「自が物ぐさなりや

こそ家老共が此寶藏の内にお爺様から貰ふた一万町の朱印が入て有る番せいといふたに因
て錠前戸前の番をして居る何とさつ物ぐささか／＼ 銀「此長の日をひめもすの御番 空
「無御退屈にムり升せう 銀「自はそなた衆には見せられぬ慰がある皆次へ立ちや 五人「イヤ
夫では 銀「行きやらぬと挿付ぞや 五人「チ、こは「ト逃て這入ると銀杏の前蝶を見て」唄
知らず知られぬ中なれど浮れまひもの去逆はふいと顔を見合せ○こがれこがる、身は陽炎
の○あれ虫さへもつがひ離れぬ揚羽の蝶「ト桂之助銀杏の前互に脊中同士行合顔見合せ」
銀「桂「ハア 桂「わりや誰じや 珍「茶道珍慶でムり升る 桂「コリヤ腰浪は死だ泣てくれ 珍「エ
、桂「泣けいやい「ト銀杏の前珍慶が耳を引て上の方へ連行さ」 銀「我身の顔はかかしい顔
じや 珍「何じや人の顔がおかしい「ト腹立る」 銀「笑やいの 珍「エ、」ト桂之助又鼻を摘み
引つ張て来て」 桂「なせ泣かぬぞおれも泣程に泣てくれ 珍「是非泣にや成升せぬか 桂「可愛
や／＼ハア 珍「可愛や／＼ハア「ト泣く」 銀「コレ「ト引つ張て往て」 銀「サア笑や○笑らや
らぬと「ト天窓を平手で叩く」 珍「アイタ、ハ、笑ひ升る／＼ 銀「ホ、銀「珍「ホ、ハ、桂
「サア走れ 珍「エ、 銀「腹を立ちやいのう 珍「エ、 桂「走れ／＼ 銀「腹立ちや／＼」ト兩人
して茶々無茶にする」 珍「エ、コリヤやくたいじや助け舟／＼」ト下手家体へ逃て這入る」
桂「ヤアやるまいぞ／＼」ト追駈け障子開くと磯菜水干金烏帽子舞扇を持立て居る茶道具一

二飾りある」銀「アレエ」ト上手へ逃込む」桂「ヤアろなたは藤浪 磯茶殿さん 桂「ナ、藤浪
 じや」ト磯菜を下にすへて顔を見詰て居る」銀「永き夜すがら引締て昔談の飛鳥川」ト
 桂之助は心の納る思入銀杏の前そつと覗く」桂「ム、人手にかゝつた藤浪が堅固の体り若
 しや幽霊」ト銀杏の前胸りして下に居て障子さす」銀「お目の色といひ今のお詞そんならあ
 なたは御本性に 桂「如何にも 銀「ア、嬉しやのう 桂「音聲といひ矢ッ張りそなたは 銀「ハ
 イ藤浪でムリ升わいさア 桂「そちが横死と開し時はつと思ふた其跡は夢か現つか辨へず今
 又無事な顔を見て 銀「夫程迄に〇お痛しやなア 桂「眼前切られしそなたがマ、何にもせよ
 此様な嬉しい事はない烏帽子水干も捨てマア爰へおじや」 銀「アイ」 桂「ろなたと二
 人斯うして咄すと此程楽みな事はないわい 銀「ハイ左様でムリ升る」ト辞儀する」桂「斯う
 咄し斗り来て居ては氣がつまるどうぞ酒宴を催したいものじやが来いよ」ト手を叩く
 珍慶出て」珍「御用でムリ升るか 桂「膳番の者に酒肴持参せよと申付よ 珍「畏り升た 桂「待
 て」ト表向に申付ては家老共が異見するであらう 珍「そりやようムリ升る私が樽と肴をい
 かりて参じ差上升せう」ト這入る」桂「樽ぐち酒を取て来おつたら燭をするに困つたものじ
 や〇ナ、幸ひあの釜がたぎつてあるあれで燭をせうかい 銀「夫が宜しうムリ升せう」ト銀
 杏の前家体より出て」銀「面白い遊びなら自らも寄せて 桂「銀杏の前も共々に」ト奥より珍慶

二升樽と肴籠に鯛と蛸を入持て出て」珍「サア」取て参じ升た 桂「ナ、出かした」夫
 に差置次へ立て 珍「ハッ」ト這入る」桂「逆もの事に下た」の世帯事を致して遊び度いも
 のじや 銀「そりや私が手の物でムリ升る 桂「スリヤ下々の事迄も 銀「ハイこちらの人と宿這
 入り 桂「ヤア 銀「イヤサア下々で宿這入といふ遊びがムリ升る 桂「夫面白からう差置して
 たも 銀「ハイ」マアあの茶道具を是へ運び升せふわいさア 桂「サ、手傳や」 銀「アイ
 」ト三人家体の茶道具を前へ持出て」銀「マア此手附の水指がらろりの心樽から酒を是
 へ移し升る〇ナ、火がぬるいさうなお姫様其尺八を火吹竹にして穴を押へて吹て下さり升
 せ」ト銀杏の前尺八の歌口と底の穴を押へ真中の所を吹く磯菜樽の酒を移しをがら」銀「そ
 りや何を遊ばすぞいの 銀「爰を押へて吹て居るわいのう 桂「何をやるやら身が吹て遣はさ
 う」ト桂之助取て火を吹く」銀「お肴は何じや」ト蓋を明け」銀「コリヤ鯛も蛸も生じやいつ
 その事此釜で蛸をゆで」こまさう 桂「夫がよい」ト磯菜蛸を釜の中へ押込み色々わつ
 て」銀「大方蛸がゆだつたであらう殿様其茶杓で引かけて引出して下さり升せ 桂「合点じ
 や」ト茶杓を持釜へかゝり」桂「サアやくだいじや」蛸めがおこりおつたかして眞赤
 になつて大手をひろげて滅多に出をるまい 銀「譯もない私が出して上げ升せう」ト釜へか
 かり」銀「コリヤどんな事じや 銀「蛸が釜一ぱいになつて 桂「是が下世話よいふ通り 銀「

鎌子で頼ゆでたやうになり升たホ、ホ、桂「イヤモウ色々事ではつとした肴はなくても
 一ツ飲う盃は此夏茶碗 鶴「イヤお盃の用意は申附置升てムリ升る 桂「ヤア 鶴「腰元中用意
 の品早う是へ」ト空蟬嶋臺明石くわへ關屋長柄早月三寶土器若菜も出る」桂「此設は 鶴「た
 つた一つの私がお願どうぞ姫君と祝言を 桂「何ぼうるなたの願ひでも今更どうも 鶴「たつ
 ておいやとかつしやると此藤浪は歸り升ぞへ 桂「せう事があい盃して遣はさう 鶴「姫君様
 嚙 五人「お嬉しうムリ升せうなア 鶴「お詞の變らぬ内早う」ト一寸盃事ある明石奥よ
 り蒲團を持出て二重へ敷く」鶴「お盃が済たら爰は端近春風がお寒からうマアあれへ」ト兩
 人を蒲團の上へすはらせる五人の腰元奥へ這入る磯業机帳にて兩人を覆ひ色々心遣いのこ
 なしあつてそつと聞耳してとんと下に居る返し

元の決斷所の道具へ戻る右二重之上に狩野歌之助すこり前へ訴狀大分直しある平舞臺に團
 左衛門藤太夫軍兵衛袴斗りにてすはり居る橋掛りに法被袴突扣へ居る九ツ時の太鼓にて道
 具納る 歌之助「願人共召出してよからう 兵衛「訴訟の者共罷出升せい 長治、鶴「ハイ」ト
 長兵衛治左衛門權右衛門長松の手を引き與太郎付添出る」橋「下にからう 皆々「ハイ」ト
 歌「町人共今日は月並の裁斷當殿御家督相續に付き直々に訴訟開し召るゝ有難く思へ 皆々「
 エ、有難う存じ升る 向ふより」大殿のお成り 歌「殿のお成りとムる各」ト皆々平舞臺へ下り

平伏する藏人先に小姓刀を持付添出て」藏人「訴訟の者共相揃ひ居るか 歌「残らず罷り出升
 てムリ升る」ト藏人本舞臺へ来て二重に座に付皆々並ぶ」鶴「訴訟を讀上てよからう 歌「ハ
 ヲ○御城下京町日野屋與太郎相手方同町佐田屋治左衛門私儀先達て治左衛門娘筆と申者と
 親共存生の砌言号致置候處此節より右縁邊變改被致候て一分難相立候乍恐御威光を以て
 取繕仕候様被仰付可被下候 歌「双方共夫へ出よ 二人出升せい」 治、與「ハイ」ト 歌「治
 左衛門一旦の契約違變に及ぶには子細が有う明白に申せ 治「約束致した折柄はあの方が年を
 隠し跡で篤と承ればあんまり年が合升せぬ故變改致すのでムリ升 與「年はいくつ違ふても
 約束を違へおれが男が立ぬわい 治「どの様にいやつてもせめて半分違ふ事ならよけれと十
 五も違ふ娘がどうやられるものでいの 鶴「治左衛門とやら半分違へば嫁に遣すと申か 治「
 ハイ左様でムリ升る 鶴「與太郎其方が年は 與「廿五歳に成り升る 鶴「我が娘は 治「當年漸
 う十歳でムリ升る十五も違ひ升る故變改致升てムリ升る 鶴「よ、○よい」ト然ば今五年相
 待て祝言致せ 治「エ、 鶴「與太郎三十歳に相成は我が娘が十五歳に成るではないか然らば
 半分の相違双方申分は有まいが 治「いか様ようした算用じやなア 兵衛「御裁判が相濟め
 ば立て」ト此一件の人数這入る歌之助又訴訟を取上げ」歌「高島村の百姓權右衛門相手
 方同村七兵衛伴長松私伴太郎吉と申者右長松と叩き合不慮に相果申候何卒下手人に御取被

戒被下候様奉願上候〔ト藏人新吾丹治に何か言付る兩人奥へ這入〕 藤「權右衛門 四七兵衛
 伴を連れてつゝと出い 藤「長「へいへい」〔ト出る新吾高臺に菓子を取せ丹治三寶に小判を積み
 持出て前に置く〕 藤「權右衛門今身が申聞す理解篤と聞け未だ十歳未滿の小兒何辨へなき
 仕業と相見ゆる了簡を加へ助命を願ふが却て追善にもなりさうなもの是に用意させたる此
 二品の内菓子を取らば預是なき小兒と諦め助命致して遣そがよい又金子を取らばおとなの
 魂刑罰申付であらう 藤「御尤な御捌きか金を取升たらさうぞ敵を取て被下升せ 藤「ニリヤ
 悴近う来い」 長松「ア、〔トツカ〕ト行く」 藤「コリヤ此二品の内くれう程に欲しいとい
 思ふ物を取れ 長松「殿様かりや此金が欲しい」〔ト小判を引摺む〕 七「ヤイおのれ夫をとつて
 は 藤「無禮千萬下におらう 長「ハア」〔ト泣く〕 藤「あの通りでムリ升る早う敵を取らしやつ
 て下さり升せ 藤「イヤコリヤ彌々助けてやらすばあるまい 藤「そりやお詞が違ひ升る 藤「
 去ばサ此金子に手をかければ命を取らるゝと知りながら小判が欲しいとは預是なき小兒の
 魂殊には十五歳になる迄制外たる四海の式目 藤「夫でも 兵「扣へおらう 藤「ハイ」〔ト
 四つの太鼓鳴る〕 藤「最早巳の刻今日の御裁断是迄 新「殿には入らせられ升せう」〔ト向ふよ
 り侍一人走り出〕 侍「申上り升る城為宇治の百姓と申て親子連の願人御門外に扣へ居り升る
 藤「刻限が切たれば明日日出升せいと申渡せ 侍「ハッ 藤「待て」旅がけの願ひとあれば聞て

くれう是へ通せ 侍「畏つてムリ升る」〔ト向ふへ這入る〕 軍「町人共 四人」立升せい 皆「有
 難う存じ升る」〔ト皆々橋掛りへ這入る向ふより百姓太治兵衛女房お澤世話形り旅がけにて
 出て〕 藤「ちやつと願ふて下さんせいなア 太「治兵衛」あいわい」〔ト本舞臺へ来る〕 藤「殿
 の御前下におらう 太「へい」〔ト平伏する〕 藤「願の筋は何事 新「丹」訴状をしい」 太「
 私は親代々の無筆尤こいつめはいろはのにじり書も致し升れせめらうの事さうぞ口願ひに
 さして被下升せ 藤「然らば申上い 太「こいつと私は親子でムリ升る此めらうは聲を取升て
 ムリ升る 藤「只今とつさんの被申升る通り私が夫は大作と申て」〔ト藏人を見て〕 藤「ヤアお
 前は 太「娘お前は 藤「テモマア能う似た〇と、様いなア」〔ト藏人を教へ〕 藤「さうじ
 やないかいなア」〔ト藏人を見て〕 太「ヤアありや聲殿じや 藤「さうじや」〔ト立かゝる〕
 藤「ヤイ」當殿の御前尾籠千萬 四人「下におらう 太「澤」ハイ」〔ト下に居る〕 藤「男殿女
 房お澤 澤「エ、 藤「無事に有たなア 藤「スリヤ此兩人は 藤「身が爲には女房員 太「こなた
 の聲殿 澤「こちらの人」〔ト寄うと〕皆々を見て〕 藤「ど、様立派な殿様に成て居やしやんす
 のよ私が傍へいたら又下に居らうと阿るで有うさア 太「エ、殿様に成うが暇状を取らぬ内
 は私の男じやないかい 澤「夫じやといふてあの様に袴をいてこないにして居やしやんすに
 因て傍に寄りにくい 太「エ、婿の明ぬ奴じやドレおらが」〔トとんと居直り〕 太「コレ聲殿」

ト急度いふてちやつと居住居を直し」太「娘よ我も爰へ来て呉いや」トお澤こはく傍へ行さすはる 澤「コレ大作殿跡の月の晦に釣に朝から出やしやんした故七ッ過には戻つて有うと燭を付て待て暮せと夜半になれと戻つてムんせぬ是はマアどうしたものとやと案じまいものか所が夜明方芋洗ひの小八殿がムんして大作は昨日山の代で近江の高島とやら侍が無理に駕へ乗せて連れていたとの委敷咄し」コリヤ大方お國うら迎が来たので有らうぞ行衛を尋ね逢して下さんせとせがみ立此近江の殿様へ願ふたら知れぬ事はあるまいと夫を心の樂に親子連れて尋ね出た道々の神様や佛様に立願掛けの御利生で思ひ寄らぬまめな顔其上立派なお姿に成りようマア達者で居て下さんしたなア 澤「其根は尤至極身が當城へ歸國せしは段々深き子細もあれと其儀は追ての事尋來りしそちが貞心此儘に館に止め身が奥に定むると舅殿にも安心あれ 澤「とつさん聞かえやんしたか 太「チ、應嬉しからうかれも嬉しい 澤「エ、嬉まうムんすわいなア 澤「存掛なき御兩所の御入來若殿の奥方舅君は我々が即御主人 澤「爰は端近先々あれ 澤「ハイ、そんなら免しておくれや」ト兩人二重へ上る」兵「早速乍ら奥様には御衣服を改められ升せう 新井「イザお召われ升せう」ト廣蓋に襦を載せ持出て着せる」澤「とつさん見て下さんせ 太「チ、ゑらいはく歩て見い」トお澤

不調法に歩く」太「すはつて見い立て見い 澤「チ、しんど」○こちの人似合たかへ 澤「中々よく相應した此上は詞も改め萬事に心を付てよからう 澤「我々始め一家中の男女は皆あをたの御家來 澤「只どうせい斯うせいとお心安う 兵「隨分子細らしう押柄に仰られ升せう 澤「アイ、ト子細らしうこなし有て」澤「エ、ン、ヤイ侍様共め 四人「ハッ、ハッ、ハッ」澤「さつきは大きき目をむいてようしかりかつたなア 太「娘をこらがきめ所じや 澤「重々の不調法恐れ 四人「入升てムり升る 澤「堪忍してやる替り言付る事がムんす 四人「何事成りとも被仰聞下さり升せう 澤「そんならとつさんを奥へ連立て往てまゝやさゝをたんと上てくれ急度申付たぞ 兵「畏つてムり升るイザ御隠居様 太「チ、イ、そんなら馳走に合ひ升せうノウウ輝殿殿様 澤「お心置なく 太「番頭どん臺所へ行升せうか 澤「とつさん杓子當りがわるか言ひ被成また阿つてこますぞ 太「何をいひ居るやらハ、ハ、ド、ド、ヤ參り升せう」ト歌相方に成り兵藤太治兵衛を連奥へ這入ると上手より」澤「若殿様は何所に居てじや若殿さん」ト「ト、いひ、く、出る」澤「コレ、く、女中さんこちの若殿様は爰に居てじやがどつから尋ねてムんした 澤「チ、そこに居てかいなア久さんの事で逢に來たものを居間を抜出て手の悪い」ト顔をみて」澤「ヤアコリヤ違ふた何の事じやぞいなア 澤「見りや美しいお山さんが馴々しい物のいひやうらんならアノお山を○コリヤモウ奥様では居られぬ○こちの人殿様ちつと

の間傍に居ぬ内よりあんな事仕出かさしやんしたなア〜 藤「是は迷惑此藏人其以て 澤
 イエ〜 覺へまゐりといふとさぬ〜」ト胸倉をつて 澤「こなさんは〜」ト振り廻す藏人
 思はず碎けるこなし 藤「ヤイどうさらす 澤「悪性の吟味するのじやわいなア 藤「ヤこい
 つが〜 愛放せ愛放しやがれ」ト振り放す 丹「若殿コリヤ何事でムリ升る 藤「ヤ 新先々
 お静りおられ升せう」ト藏人心付 藤「婦人の身として尾籠千万 澤「エ、お前はマア」ト立
 かゝるを」 澤「マア待しやんせコリヤ間違でムんすわいなア 澤「エ、あた腹の立つ」ト其益
 打付る」 藤「かのれ投打さらそな 澤「マア〜 よいわいなア 藤「止るなく〜 せづきのめさ
 にや腹が癒ぬわい 澤「叩うんせ〜」ト骸を突付る」 澤「ア、コレ夫では済升せぬわいなア
 新丹「モン若殿様」ト色々止て 澤「是いなアお前は殿様じやないかいなア 四人「御前様 藤
 誠」ト「氣の付こなし」 澤「女中さん譯も聞かずに怪氣するとはあんまりじやわいなア 澤
 エ、 澤「爰に御家老衆も見てじやないか 澤「私しやいふ氣はなかつたれどツイ奥様を忘れ
 てのけた 藤「身共迄に面目を失ひせたら不降千萬 澤「誤り升てムんすさうしてお前はこちらの
 殿様と譯のあるお方じやないかへ 澤「私が言交はしたは久様といふて外にムんすわいなア
 澤「さうとも知らず」〇どうぞ堪忍イヤ御堪忍しておくれ給へ 藤「以後を急度たしなみおらう
 ぞ」ト向ふより侍走り出て 侍「申上る千島の冠者吉久公御上使として御入でムリ升る」

「ト引返して這入る」 藤「我君より御上使とは扱は 澤「モン何ぞ氣遣な事じやムんせぬかへ
 藤「イヤお身は此女を伴ひ暫時此場を 澤「合点でムんす申女中さん奥へムんせ 澤「アイ〜
 」ト兩人奥へ這入る」 藤「悪事千里を走る諺家の大事に及だわい」ト臆病口より道犬橋掛り
 より山左衛門歌之助出て 山左衛門「我君御上使御入の趣 道犬「察する所桃山御殿造營延引の
 お咎あるか 藤「何にもせよ無禮なき様 皆々「ハッ」ト皆々出迎ふ向ふより千島の冠者三寶
 に御教書を載せ出て」 伴「此度我君久吉公三韓御征伐の思召肥州名古屋の御陣より上意を
 承り上洛せし千島の冠者吉久聚樂の御殿に於て久次公へ上意を述へ猶承たる當家の邪止亂
 し來れと仰に因て則御紋の衣服を着すれば我君の御名代けふ一日の大領久吉 藤「遠路の所
 御苦勞千萬當家の守護佐々木藏人定綱お出迎 皆々「申上る 千「是は〜 御叮嚀吉久祝差
 に存る 藤「イヤ先是へ 皆々「御通りおられ升せう 伴「役目なれば上座御免」ト二重の上の
 方に相引にかゝる」 千「我君の御教書 皆々「ハッ 千「此度佐々木一門の者へ申下す不審の條
 々委細具さに冠者吉久演説に可及者也依て下狀如件慶長十五庚戌の年眞柴大領久吉御判」
 ト三寶に載せ差出し」 千「慎で頂戴おられよ」ト藏人両手にて取て」 藤「紛ふ方なき大領の
 御袖判〇御上意の趣被仰聞下されうならば 皆々「有難う存升る 千「君の上意別儀にあらず
 桃山御殿造營の儀今に於て延引殊に以て御用木を賣代るおし嚴命を輕んずる條以ての外の

お怒り先年石川五右衛門盗み取り湖水へ沈めし千鳥の香爐當家より取上し功に因て預け置るゝといへ共一先君に奉るべき旨まつた佐々木家に傳來せし金岡か盡きし百蟹の一卷并銀杏の前か化粧料の一万町の御朱印三品とも無滞返上に及ぶべし若し承引なきに於ては早速軍勢を指向けられん君の御上意 藤上意の趣承知奉る 道「イヤ」殿香爐朱印二品は格別百蟹の一卷は 千「紛失致したか 道「何者とも知れず奪取り密に詮議眞最中 千「ハチナア」ト橋掛りより神職齋宮六面の手箱を八足臺に載せ持出る」齋宮ハツ私事は唐崎明神の神職齋宮と申者火急に言上の旨あつて罷出升てムリ升る 山左「今日は御上使の御入り願ひの筋あらば追ての沙汰歸れ」齋「イヤ打捨置れぬ子細故押ての言上此度明神の宮殿修覆に付玉垣を取退し所辰巳角の敷石の下より斯様な怪敷箱を掘出せし故早速御覽に入奉り升る 藤「其箱是へ 藤ハツ」ト藏人の傍へ持行奥より兵藤朱印の明箱を持出」兵「ハツ」一大事が出来仕てムリ升る 藤「一大事とは 兵「御寶藏の大地を穿ち抜穴をしつらひ一萬町の御朱印紛失御箱は斯の通り 山左「何御朱印紛失とは當家の大事 道「寶藏の御番は銀杏の前様此所へお伴ひ申せ 兵「畏り升た」ト兵藤奥へ這入る」道「コトヤ是六面の手箱と申て呪咀の法に用る器箱を開かば事明白齋宮とやら追て沙汰に及ぶであらう立て」齋「有難う存升る」ト橋掛りへ這入る」兵「銀杏の前様 腰元皆々」サアお越あられ升せう」ト兵藤五人の腰元銀杏

の前を伴ひ出る」銀杏「腰元共と双六して遊んで居るものを何じやぞいなア 道「姫君様お下にムれ 銀杏「合点じや」愛らへすはらう○其盤持ておじや」ト關屋双六盤を直す」道「コトヤ姫君双六所じやムらぬ一万町の朱印紛失致してムるぞや 銀「夫を自が知た事かいなア 道「イヤ寶藏の御番はそなたの役目但し言譯の筋がムるか 銀「なうてういの錠前戸前の番をせいといやつたに因て錠前戸前の番は急度して居たわいの何も朱印の番せいとほろな言附はしやるまいがの 道「サ夫は 銀「こちらは知らん」道「ハチ困つたわろだ」ト向ふより岡平泥助狀箱を奪ひ合ひ出る」山左「うちや下郎の岡平 道「紐下の土子泥助 藤「何故の其争ひ 岡「ハツ昨夜旦那の御使にて京都より歸がけ走り井の邊にて出くはしたる此さる松め怪敷存じて子細を問へ物をもぬかさず駈出すぞつこいやらぬと争ふ内何か怪しき此密書泥助うぬに渡してよいものか 岡「所を」ト立廻て泥助を當る」山左「何にもせよ歌之助改め見よ 歌「是へ持て 岡「ハツ」ト歌之助受取開きて白絹を出す軍兵衛は箱を割中より人形を出し」軍「此人形に何か裏音が相見へ升る 山左「双方讀上げ 歌「高島の寶藏に納る一万町の御朱印奪取り給はり候へは褒美として金子百両を遣はすべきものなり月日名古屋山左衛門軍「眞榮親子が命を断て四海掌握を希ふものあり佐々木知國敬白す 兵「スリヤ御朱印の盜賊といふ」藤「山左衛門殿であつたか 岡「調伏の願主といふは 軍「若殿桂之助様 四人」ヤ

ア、道「山左衛門に纏ふて」ト泥助起て」泥「山左衛門腕廻せ」ト掛やうとする」岡「實否も糺さずお旦那にはで差たら五体微塵に叩き碎くぞ」泥「何を」ト立廻つて泥助を取て押へ」岡「動きやがるな」道「科ある山左衛門に纏かくるをかせ妨ぐる」千「イ、ヤ山左衛門に科はない斯る密事を計らんもの我姓名を記し置うつけが有うか」ト此内銀杏の前腰元と双六を打て居て」銀「チ、思出した」四人「何をかつしやるぞいな」銀「朱印」持て居るわいおア」ト出す」道「ヤア」銀「母様のおつしやるにはひよつと盗まれてはならぬに因て本間の朱印は大事にかけて持て居いといふて下さんした故肌身放さず持て居る寶藏又入てあつたはありや賈物じやわいの」道「スリヤ夫が誠の御朱印」○ドレ」銀「マカ」ト述て這入る腰元續いて這入る」山左「詮議有る其下郎奥庭へ引据へて置け」岡「こいつでムリ升る」ト引立這入る」道「馬鹿娘と思の外誠の朱印を所持するとは」○其上當家代々の重寶百箇の一巻は先達紛失致した」千「罪科重る佐々木一家大領への申譯藏人殿御思案がムるかな」藏「申譯の筋といふは」○小姓共硯を持て」小姓「ハア、」ト硯を持行く藏人扇面へ歌を書く」藏「恐れ乍ら御覽被下れう」千「散る逆も根にこそ歸れ櫻花又來る春に逢ふよしもがあムウ」藏「御返答の其間奥殿にて籠酒一献」千「詞に隨ひ御馳走に預からんナ」山左衛門とやら君は船也臣は水也水能舟を浮べ水又船を覆す心を籠めて無事を斗るが肝要あらん」山左「御説の趣承知仕て

ムる」道「此上は賢治り」山左「調伏の申譯」千「詠歌の一首」藏「上みの五文字を」道「其判断が山左「當家の浮沈」千「先夫迄は」道「山左「暫時の御猶豫」藏「響應の用意致せ」皆々「畏てムリ升る」千「方々案内」藏「先づ」皆々「お入りあられ升せう」ト皆々奥へ這入る」山左「御上使お立の刻限迄に紛失の寶調伏の申譯相立ねば佐々木の滅亡若殿の御賢慮ハテ何とがな」ト岡平橋掛りより走り出て」岡「土子泥助繩を引切り落してムリ升」山左「詮議のおどり取送してよいものか身ばつかけて」ト袴の股立さりと取る奥より臍月出て」臍月「山左衛門様御上使様のお召でムリ升る」ト這入る」山左「何御上使のお召とな」岡「下郎はお先へそうぞ」ト向ふへ走り這入る」山左「先づ御上使の御前へ」ト奥へ行うとして」山左「向ふも氣遣ひ」○こなたも大切」ト往たり戻たりして」山左「ムウ」ト手を組思案のこゝ返し

造物見付木賊塀真中敷寄屋心の家体上の方高殿一面に御簾掛けあり糸櫻盛りの体真中の家体千鳥の香爐を蜀江の錦に包み卓の上に乗せ卓下に一輪生け飾りあり平舞臺真中に藏人袴形にて駒下駄を履き椿の折枝を持て居る上手切戸の外に桂之助下手切戸の外にお澤立身にて内を伺ふて居る琴入りの難波獅子にて道具納る」藏人「八千年を春とし八千年を秋とすと唐土人の稱せし花も終よと落て塵芥ハテ定なき浮世じやおア」桂「其聲は兄者人ではムらぬか」藏「弟桂之助」澤「これらの人大作殿と今ではいはれぬ我夫マ定綱殿夫へ參つて何角の

お話し「ト這入らうとする」藤「イヤ其切戸必ず明けな大切な工夫の妨げ」藤「弟其方にも今暫く退き召れ」桂「イヤ」我爲まは眞實の兄者人御上使へ申譯相立ねばお身の御難義藤「イヤ氣遣召るな拙者が胸に○コノ奥人の命は椿の花いつ何時散らうやら今迄とは違ふぞ蔵人といふ武士の妻必ず未練な心を持たな」藤「如何に殿様になつた連むつかしうな事斗り桂「兄者人」○武將への申譯は桂之助が一命を召れお身の明りをか立被成て下されい藤「其方に生害をさす程ならば斯斗り心を痛めうか蔵人が志し必ずむろくにならぬやう御合点でゐるかな」桂「左様迄のお痛み如何で相背き升せうや」藤「此様にして居る内も此胸騒ぎイヤ」矢つ張ろこへ居て「ト明やうとする」藤「其敷居越すがいな夫婦の縁も是限り」藤「エ、藤「大切な思案の妨げ弟連も同じ事」桂「澤、じやと申て」藤「ハテ行きやれといふに」ト兩人はたたくと足音して又うつと戻り伺ふて居る」藤「先は安堵」ト二重へ上り椿を一輪生け両肌脱き」藤「地水火風は五体の借物空より出て空へ歸る南無阿彌陀佛」ト刀を突込む」桂「心得ぬ今の物音」藤「何にもせよ」ト切戸を引明け内へ入り」桂「ヤア兄者人は」藤「腹切らしやんしたのいなア」桂「澤、ヤア」ト山左衛門駈付け」山「はや御生害あられしか」桂「澤、さうじや」トお澤は有合ふ刀桂之助も指添に手をかけるを」藤「待て兩人共犬死するか」藤「夫じやといふて」藤「ハテ今相果御老年の太治兵衛殿は何者が御介抱申ぞ」藤「エ、藤

桂之助も其通り一旦館を落延て紛失の賢を詮議致し佐々木の家名を起さずば先祖へ孝が立まいぞや」桂「澤、コリヤ死るにも死なれぬか」藤「ハア、」ト泣く」山「チエ、死したり残念至極此上は御上使のお供して聚樂へ趣き詮議の日延を願ふ迄は惜からぬ命を延べるも忠義の一ツ」藤「我幼少の砌劔難の相あるに因り武門を遁れ長生を保たしめんと多病と言立一書を殘して國遠せしも母の慈悲然るにさいつ頃山左衛門密に我を尋ね來り百蟹の一番紛失藤混が最期より桂之助が狂氣の由逐一に物語跡目なければ立返り家督相續致せよと忠臣の勧めもだし難く歸國せし其日より用木を掠めし科資の紛失の誤りも此身に引受け腹かつさばかんな兼ての覺悟左は知らずして女房お澤慕ひ來りしけなげの心底嘸便りなくも思はんが劔難は遁れ難く前世の因果と諦めよまつた調伏の人形も奸者の仕業と思へ共証據なけば其方が申譯相立ず片時も早く當城を立退其身を完う賢の詮議呪咀の虚名も暗れ渡り再び故郷へ會稽の錦の袖を翻へすを草葉の蔭より待て居るぞよ」桂「御意を背かば御恩を仇仰せに隨ひ一旦此場は」藤「チ、出かす」山「左、若年なれども悴山三忠義の所存は忘るまじ路次のお供に召連られ然るべう存じ升る」藤「息ある内に發足して安堵の臨終させてくりやれ」桂「お名残は盡せねど長居は恐れ参り升」藤「銀杏の前は何國にある是へ」ト銀杏の前上手の御簾家体を出て」藤「蔵人様思ひ掛けない御生害あなたがお果遊ばして桂之助様と夫婦に誰

が致してくれ升せうぞいなア 桂ハッ心得ぬ銀杏の前常の愚昧に引かへて 山「正しき今の御一言は 銀御不審は御尤自が病氣はみんな殿御が大事から 桂ヤ何と 銀エ、聞へ升せぬ御上意により有難い御縁組興入の日を待甲斐もなう白拍子藤浪とやらと深い中と聞く悲しさ不束な自故逆も添ふては給はるまい我身一ツは捨もせうが勿体なくも上様のお媒縁が切ては大切を殿御も拘る罪科と詮方なさの空病浮世をすねて暮すのも皆あなたがかいとしいから心の内のやるせなさ不便と思ふて下さり升せいなア 藤ハ、ア賢女とも貞女とも類ひ稀なる志し 桂此上は實の詮議家再興が即追善 山左「悴山三と心を合せ一時も早く 桂然らば是より 銀そんならあなたは 桂「實の詮議仕出して歸寮の上にて祝言もするわいのう 銀ろんなら桂之助様 桂「兄者人 藤「早く行け」ト桂之助走り這入る磯菜花形を抱き組子と切結び出る」 組子「花形丸を渡せ」ト立廻り山左衛門組子を切り」山左「三八が女房磯菜此体は 磯「道大殿の計らひにて花形様を害せんどの工み事 花形「磯菜とやらの情けにて危難を遁れし甲斐もなうユリヤ何と致し升せうぞ 藤「磯菜」弟花形が身の上其方夫婦を頼むぞよ 藤ハッ女でこそあれ首尾ようお供し夫へ手渡し 山左「速健氣の今の一言君にも今端の御安心 藤「女房近う」其方は銀杏の前諸共舅太治兵衛殿を頼みて身を密め山三諸共心を合せ家の治り頼むぞよ」トお澤かぶり振る」 藤「夫婦の縁を切うか 澤「参り升わいなア

銀「行衛定めぬ旅なれば此朱印は山左衛門其方に預置」ト差出す」山左「ハッ此朱印も聚樂へ持参り久次公の御覽に備へ何卒無事を斗らん所存 藤「佞人原の目に掛り過らば悔で返らず早く館を立出よ 澤「是が此世の別れじやもの 銀、澤「何と見捨て行れ升せうぞ 山左「家を出る時妻子を忘れ 藤「親をも忘る」武門の習ひ 銀、澤「とはいふもの、藤「未練なやつ の 澤「サア花形様 藤「銀杏の前様 藤、澤「ムリ升せ」ト三人向ふへ這入る」藤「モウ是で一つの安堵此上は御上使への返答」ト上手の御簾巻上る千島の冠者相引に掛り居て」伴「櫻の詠み歌我君への返答吉久借に承知致た」ト下りて来る」藤「千島の香爐返上奉る上からは是を功に桃山造營調伏の申譯二品の資詮議の間 千「百日の日數延引は某が所領に替へ君の御前を申なだめん 藤「エ、有難う存升る」ト香爐差出す千島の冠者取て」千「おぼるげならぬ武將の寶吉久内見」ト帛紗を取ると數多の千鳥群れ集る」伴「紛ふ事なき千鳥の香爐吉久借に落手致た」ト帛紗を覆ふと千鳥立去るシヤン」ト 山左「早申の上刻 千「斯る愁を此儘に見捨て歸るも武門の習ひ 山左「上使のお立ち 皆々「ハア、」ト最前の供廻り歌之助續いて出て 歌「途中の警固は此歌之助 山左「不禮なき様 歌「ハッ」ト千島の冠者歌之助花道へかゝる藏人刀を杖に下りかゝる 千「矢張其儘 藤「御上使御苦勞 千「お別れ申」ト家來連れ靜に向ふへ這入る」 藤「山左衛門其方は聚樂へ立越其御朱印を久次公の上覽に入れ奉れ 山左

萬事首尾よく相調へ追付冥途の御供 藤忠義は盡ぬ早急げ 山左ハッ「ト立上り」 山左ヤ
 ア「山左衛門が乗替引け 向ふより」ハア、「ト戸家の内にて轡の音」 山左然らば我君 藤
 是が主従 山左三世のお別れ 藤急げ「山左ハッ」ト向ふへ這入る道犬出かけ居て「逆賊
 人扱は腹切たな手短に身共が介錯」ト抜かけるを「逆賊犬コリヤ推量に違ひなく當家を奪
 はん工みよあア 逆チ、家中大半味方に付先達て長谷部雲六に申付百齎の巻物は奪ひ取し
 が贖朱印を掴んだは一生の不覺エ、思々しい」ト朱印を出し打付る「藤いこふ様ない人非
 人め覺悟せい 逆ヤア「者共藏人を討て取れ 大勢ハ、ア」ト軍兵大勢長柄を持藏人手
 負の立廻りあつてト、軍兵逐て這入る」 逆藏人覺悟「ト立廻りにて刀を落し直に腹へ突込
 此見得宜敷返し

淺黄幕になると東西より板松を突出す本釣鐘にて道具納る但し真中に掛稻あり「ト向ふよ
 り角み切轡の紋付の立挑灯一對先箱鳥毛臺傘立笠乗物侍鎗合羽籠右行列の人数靜に本舞臺
 へ來る黒装束の忍び手鎗を持供先へ突て掛る」 歌之助「狼藉者でふる油斷召るな 若々ハア
 、」ト忍び供廻り言合せ心の立廻り」 歌お乗物を急げ「ト乗物に歌之助附添ひ臆病口
 へ這入向ふより山左衛門馬上にて鎗持草履取付添ひ出て來る上手より侍一人抜かけにて出
 て花道際にて」 侍「山左衛門殿御上使のお供先へ狼藉者が切込升てふる御加勢被下い」ト

引返し這入る」 山左「何狼藉者とな家來續け」ト家來鎗を差出す山左衛門馬上ながら韃を外
 し本舞臺へ乗り付る黒装束の忍び山左衛門に突てかゝるを様々あつて橋掛りへ追て這入る
 伴左衛門着流し百日種ヶ島を持ち稻をかし割り半身出る橋掛りばた「くになり直に引込山
 左衛門本舞臺へ馬を乗り戻すと臆病口より歌之助走り出て」 歌「山左衛門殿千島の冠者と
 名乗りし上使は周防の軍太といふ盜賊の張本千鳥の香爐をかたりとられ升てふるわいのう
 山左ヤ、スリヤ謀に落入たか 歌拙者は是より一働さッレ」ト引返し這入る」 山左イデ
 ぼつ付きて奪返さん「ト本鉄砲の音して馬の太股を打抜れし心にて刎上る山左衛門落馬す
 る所を伴左衛門出て手鎗を拾取左の脇腹を突く馬は狂ひ立ち橋掛りへ馳せ込む」 山左何者
 なればだまし討とは卑怯至極 伴「山左衛門日頃の遺恨思ひ知たか 山左人非人の伴左衛門
 扱はうぬが仕業であつたか 伴「コリヤもがくな」元來我不破の先祖は梶原の末葉にて佐
 々木家に仇ある家筋父道犬若年の砌り伴作と名乗て當家へ仕官謀を行へんと年月を送る所
 さいつ頃身が心をかけたりし白拍子藤浪より事起りうぬが伴の山三草履を以て面体を打廻
 したる奇ッ怪さ此無念晴さんものをと心に納め其場は無事に立さりしが山三めは用木の科
 を引受け行方知れず親子は一体山左衛門伴が名代草履の返報「ト我草履を脱で唾を吐かけ
 コウ「ト打すへ」 伴「肝先へこたへたか」ト蹴倒す」 山左疾くにも斯くと知るなら

ば親子共引捕へ入つ裂きにせんずものを佐々木家の御運の末エ、是非もない 伴「無念なかな、道理」コリヤ上使と成て入込せしは千島の守が二ツ子の兄弟藁の上より捨られて母方の苗字を受継ぎ本名は時知左馬五郎西海道にて盜賊の張本周防の軍太我々親子が内通にて藏人には詰腹切せ寶も首尾よく奪取たれば自然と亡びる佐々木の家名謀りかゝせて主従諸共犬死をさせられ不慮に死したる父道犬が艸葉の蔭にて應満足ハテ心地よいくたばりさまじやなア 山左聞ば聞程人面獸心お國の敵主人の仇エ、殘念なはやい 伴「桂之助は元より山三めも返り討にぶつばなし追付冥途へ跡からやるドリヤ此世の暇を取らしてやらうか」ト鎗を引抜く 山せめてうぬに一太刀なりとも 伴「切て行を引ッ外し肩先へ切込みなぶり殺しの撲様此内山左衛門の懐より朱印落る伴左衛門拾ひ上 伴「コリヤ一萬町の朱印石を尋ねて玉を得るの譬へよいものが手に入たわい」ト山左衛門寄らうととるを切倒して止めを刺す向ふばた〜にて鹿藏飛脚提灯を灯し出て 鹿「怪しからぬ胸騒ぎコリヤ只事ではない」ト本舞臺へ來る此火かけに伴左衛門小隠れする 鹿「コリヤ親旦那山左衛門様敷ケ所の深疵ヤア〜」ト伴左衛門窺ひ寄て提灯を切落す 鹿「扱こそ曲者」ト烈しき暗がりの立廻りあつてト、鹿藏を當向ふへ走り這入る鹿藏むつくと起き 鹿「うぬ何國迄も」ト追駈這入返し

造物一面に山王の廻廊真中にお澤高からげにて駕を圍ひ居る見得藤太夫軍兵衛團右衛門兵藤取巻居る庭神樂にて道具止る 伴「女と思ひ狼藉しやると赦さぬぞ 藤「こま言いはすと銀杏の前 四人「早く渡せ 澤「滅多に渡てよいものかいのう 兵「小娘な女め何れも 三人合点じや」ト藤太夫軍兵衛お澤にかゝる兵藤團右衛門駕へ行をお澤兩人を引退る藤太夫軍兵衛お澤を引立橋掛へ這入ると跡に兵藤團右衛門駕の中より銀杏を引立行うとする新吾黒装束にて出かけ兩人を投げ銀杏の前を引ッかたげ這入る兩人起上り追駈這入るとお澤駈戻り 澤「此間及早う」ト駕の中を見て 澤「ヤア銀杏様は奪取られたエ、口惜しいさうじや」ト行うとすると藤太夫軍兵衛出て立廻りお澤あしらひ兼る撲様にて駕を小楯に立廻りあつてよき程にお澤落てある息杖を取て兩人をめつた打に追廻す藤太夫刀を叩き落され取うとするをお澤刀を取て一かせ切る軍兵衛後より切付るお澤手を負ひながら軍兵衛が高股を切り手早に息杖へ刀をく〜り添へ長刀にする兩人起上りかゝるを薙ぎ拂ひ立廻り様々あつて能所に山三兵藤團右衛門と立廻りよて出て兩人を投げ藤太夫軍兵衛を引退け切倒す 澤「ヤこなた様は 山「某は名古屋山三と申者京都より立歸りたる所斗らざる館の騒動始終の様子藏人様も承つたり今一足早くば斯手疵は有まじきに殘念至極シテ銀杏の前様は」トお澤自害する 山「コリヤ何故の生害でゐるぞ 澤「悪者共を追行跡で姫君を奪はれ去言譯くれ〜」

銀杏の前様が身の上を頼升ぞへ 山三春平承知致た心置なく臨終召れ 眞エ、忝い「ト
落入山三愁のこなし此内兵藤園右衛門切てかゝり烈敷く立廻り 山姫君のお身の上 兩人
何を「トかゝるをポン」と切り」山「さうじや」ト逸散に向ふへ走り這入る宜敷拍子幕

三幕目 〔逢坂山の場〕 吃又平内の場

- | | | | | | | | | | | | | |
|----|---|---|----|---|----|---|----|---|---|---|---|---|
| 一吃 | 又 | 平 | 一娘 | か | り | う | | | | | | |
| 一同 | 女 | 房 | 左 | 枝 | 一庄 | 屋 | 野 | 呂 | 作 | | | |
| 一六 | 字 | 南 | 無 | 右 | 衛 | 門 | 一茶 | 店 | 娘 | 一 | 人 | |
| 一長 | 谷 | 部 | 雲 | 六 | 一 | 百 | 姓 | 一 | 人 | | | |
| 一太 | 治 | 兵 | 衛 | 一 | 追 | 剣 | 四 | 人 | | | | |
| 一水 | 茶 | 屋 | 久 | 七 | 一 | 大 | 津 | 繪 | 買 | 人 | 三 | 人 |
| 一正 | 木 | 新 | 吾 | 一 | 仕 | 出 | し | 大 | 勢 | | | |

造物平舞臺淺黄幕所々に床机あり上手護簀上かん風呂田樂店舞臺にござを敷き仕出し大勢
休み居る久七羨賢屋亭主にて酒の煙をして居る娘田樂を運んで居る在郷唄にて幕開く

久七殿何と結構な日和績さじやないかいのう 久七「夫故京大坂からの遊山は大きな事でも
んす ○姉さん銚子替へて貰ふぞや 娘「アイ」お銚子の替りじやぞへ 久「おつとしよ」
ト銚子を替へる向ふより雲六生醉浪人の形りにて出て」雲六「綿帽子の腰付味いぞ」どう
でも年増でなけにやいかぬわいハ、ハ、ハ「ト本舞臺へ来る」 久「サ、雲六さん機嫌じやな
雲」出口の岩が所で廿四文づつて来たのさ○サ、皆の衆ちと合でもせうかい「ト皆の中へ
坐はる仕出しやなどいふこなし ○ア、ひよんな事じやな」久「銚子切れじや 雲「銚子切
りを一ぱい呑んでそちらの田樂おこせ △是は迷惑を」ト田樂喰ひ」 雲「久七や一盃つ
けてくれんかい 久「雲六さん胴元が切れ山」ト樽をぶつて見せる」 雲「エ、しゆみたれ
商人じやなア 久「イヤ時節柄でござんすで △身代相應な喜見城でやつて居りやす」が入る
し ○春戸門で酒も呑めるこつちやない □何といなうじやあるまいか 久「マアゆるりと
してムリ升せ 娘「まだ漸うハッ下りじやわいなア △いやも是がよいにしは錢はあす持
て来升せう 雲「算用の中へ小なから田樂一ツついでこんで置て △減相な 久「お前は客の邪
魔になるわいなア 雲「そんならさう」酒取にやれ 娘「兄様取て来うかへ 久「イヤ酒はあ
るイヤない程に取て来い 娘「アイ」 雲「おむすの戻る迄待ても居られまい戻りに寄る煙
しておけ ○「サアム」 雲「ドリヤ往て来うか」ト在郷にて仕出し娘は向ふへ雲六は橋掛り

銀杏の前様が身の上を頼升ぞへ 山「山三春平承知致た心置なく臨終召れ 薄エ、悉い」ト
落入山三愁のこなし此内兵藤園右衛門切てかゝり烈敷く立廻り 山「姫君のお身の上 兩人」
何を「トかゝるをボン／＼と切り」 山「さうじや」ト逸散に向ふへ走り這入る宜敷拍子幕

三幕目 〔逢 又 阪 山 内 の 場〕

役 名

- | | | | | | | | | | | | | |
|----|---|---|----|---|----|---|----|---|---|---|---|---|
| 一吃 | 又 | 平 | 一娘 | か | り | う | | | | | | |
| 一同 | 女 | 房 | 左 | 枝 | 一庄 | 屋 | 野 | 呂 | 作 | | | |
| 一六 | 宇 | 南 | 無 | 右 | 衛 | 門 | 一茶 | 店 | 娘 | 一 | 人 | |
| 一長 | 谷 | 部 | 雲 | 六 | 一 | 百 | 姓 | 一 | 人 | | | |
| 一太 | 治 | 兵 | 衛 | 一 | 追 | 劍 | 四 | 人 | | | | |
| 一水 | 茶 | 屋 | 久 | 七 | 一 | 大 | 津 | 繪 | 買 | 人 | 三 | 人 |
| 一正 | 木 | 新 | 吾 | 一 | 仕 | 出 | し | 大 | 勢 | | | |

造物平舞臺淺黄幕所々に床机あり上手護篋上かん風呂田樂店舞臺にござを敷き仕出し大勢
休み居る久七羨賣屋亭主にて酒の煙をして居る娘田樂を運んで居る在郷唄にて幕開く △

久七殿何と結構な日和續きじやないかいのう 久七「夫故京大坂からの遊山は大きな事でム
んす ○姉さん銚子替へて貰ふぞや 娘「アイ／＼お銚子の替りじやぞへ 久「おつとしよ」
ト銚子を替へる向ふより雲六生醉浪人の形りにて出て」 雲六「綿帽子の腰付味いぞ／＼どう
でも年増でなけにやいかぬわいハ、ハ、ハ、」ト本舞臺へ来る」 久「ヲ、雲六さん機嫌じやな
雲「出口の岩が所で廿四文づつて来たのさ○ヲ、皆の衆ちと合でもせうかい」ト皆の中へ
坐はる仕出しのやなどいふををし ○「ア、ひよんな事じやなエ」 銚子切れじや 雲「銚子切
りを一ぱい呑んでそちらの田樂おこせ △是は迷惑を」ト田樂喰ひ／＼」 雲「久七や一盃つ
けてくれんかい 久「雲六さん胴元が切れ山／＼」ト樽をよつて見せる」 雲「エ、しゆみたれ
商人じやなア 久「イヤ時節柄でござんすで △身代相應な喜見城でやつて居りやす／＼が入る
し ○春戸門で酒も呑めるこつちやない □何といなうじやあるまいか 久「マアゆるりと
してムり升せ 娘「また漸う八ツ下りじやわいなア △いやも是がよいにしは錢はあす持
て来升せう 雲「算用の中へ小なから田樂一ツついで置いて △滅相な 久「お前は客の邪
魔になるわいなア 雲「そんならきり／＼酒取にやれ 娘「兄様取て来うかへ 久「イヤ酒はあ
るイヤない程に取て来い 娘「アイ／＼ 雲「おむすの戻る迄待ても居られまい戻りに寄る煙
しておけ ○「サムミ 雲「ドクヤ往て来うか」ト在郷にて仕出し娘は向ふへ雲六は橋掛り

へ久七は葎質の内へ這入る向ふより女房左枝管笠を提出て 左枝「どうぞ内に居て被下ばよ
 いが」ト舞臺へ来る橋掛りより太治兵衛着附羽織肩衣にて杖を突出て 太治兵衛「わりや姪の
 左枝じやないか 左「お前は伯父様太治兵衛様 太「久しう便りも聞なんだ我身も達者で目出
 度い」シテ又平さんも變る事もないか春先で店も忙しからうに何と思ふて来たぞいやい
 左「サイなアちつとお前又咄さねばならぬ事があつて 太「立乍ら聞れもせまひ久七殿ちつ
 どござをかり升サ、爰へ」ト兩人ござの上へ上る」太「左枝何ぞ氣遣ひなこつちやない
 か 左「サア私が来たのはお前の爲には兄様私にはと様様の太右衛門様膳所の片脇で水香百
 姓順様の死なしやんした物入から年々の年貢の未進と様は昨日水牢へ入られしやんした
 わいなア 太「そんなら兄貴は水牢へ 左「お年の上の水牢なれば急に年貢を償ふて苦しみを
 助けずばお命ちはあるまいと思へば身も世もあられうの連合の又平殿は僅か五錢か十錢の
 大津書書いて貧しい世渡り六百匁といふ金の工面盡方盡て頼む」お前一人でムんす思案し
 て下さんせいなア 太「夫はマア思ひ掛もないおれが爲にこ一人の兄貴金拵へいでならうか
 いの 左「エ、忝うムんす 太「おれが鐸の大作といふたは思ひもよらぬ佐々木の若殿で此間
 の騒動に娘のお澤迄非業の最期女夫の者が菩提の爲僅々の田地を賣代なしお寺様へ上うと
 拵へて置た金十両」ト財布より金を出し傍に置き」太「一人助けるは塔堂建るより功德じ

やげな此金を用立て水牢の苦を助けて進せてくれ」ト雲六後ろより出掛右の金をうつと取
 て金を出して死を財布へ入れ傍へ直し小隠れする」 左「本にいとまいか澤様殿御故とはい
 ひ乍ら亦に掛つて死するとは嗚お前も悲しからうが又平様の妹御も人手に掛つてあへない
 最期お前斗りじやない程に先の世からの約束とあきらめて居るがよいわいなア 太「サアさ
 うは思ふて見るもの、思ひ出して泣きいふては泣き年寄つて子に離れた程因果なもの
 ないわいやい」ト半鐘鳴る」 左「わりやモウ七つそんなら私は是から直に」ト右の金を頂き
 懐ろへ押込む 太「随分共怪我せぬ様に 左「去らばでムんす」ト向ふへ這入る」 太「可愛やあ
 いつも親故にいかひ苦勞を仕かるなア」ト臆病口へ這入る雲六伺ひ出て金を出し」 雲「久し
 ぶりの御對面」ト上包を見て」 雲「冥加金十両宇治の里百姓太治兵衛エ、忝い」ト金を手拭
 の端に包んで」 雲「是から祝ひ事に御神酒を上げにやならぬ久七や」 久「アイ」ト
 出る」 雲「酒を持って戻つたか 久「イヤまだ戻り升せぬ」ト橋掛りより百姓一人畚を鋤に通
 し雁を柄に引かけ出て来て 百姓「久七様精が出升の 久「正八殿持て居やんすは雁じやない
 かいの 百「サア聞んせ野邊に居たらばた」と鳥の羽音見りや此脇じや鋤の柄一つでツイ
 ころりむざ」く喰ふでもかい賣たい物じやが 雲「其鳥おれが買ふてやらう 久「ヤレ情ない
 ○イヤ結構な買手じや 百「なんばに買ふて下さり升る 雲「マア小判一両 百「エ、○ろりや

マア本間でムリ升ウヤレ〜小判一両とは夢ではあいか知らぬわい「ト雲六に渡し」百ど
うぞお金を被下升せ早ういんで暇にも悦ばしたうムリ升る 雲「今はない 久「大方こんな事
であらうと思ふた 百「そんなら鳥を戻して被下升せ 雲「いやじや現金で買ふ應對はせぬわ
いある時やらう 百「そりやこまた横取じやぞや 雲「横取とはおのれ此類桁を「トくらひし
蹴倒し」雲「とつと〜うせまばすこたぬくぞよ」ト百姓氣味悪さうに」 百「サあいわい〇
があんまり 雲「なんじや 百「イヤ夢じやなア」トばやさ〜這入る」 雲「大盗人めが〇先取
込とは起縁もよいは最前の十両」ト金を包んだ手拭の端に雁の足を括り振擽げ」 雲「是を軍
の門出に一勝負やらかさう」ト行うとする鷹羽叩きしてばつと立ち破風口より向ふへ行」
久「ユレ〜雲六様鳥が向ふへ」ト雲六色々あつて」 雲「エ、口惜いせしめた物をめいつめ
に取られるといふは思々しい 久「サア取り返す思案はないか 雲「ナ、さうじや唐土の養由
は雲井の鷹を射て取る我朝の頼政は鷲を射て取る左程こそなくとも射てくりれう 久「鳥は
飛んでつ〜と往た」ト此内鷹向ふへ這入る」 雲「ヤア〜影も形ちもモウ見へぬが鷹とおれ
がこん比らへ此脚骨の續ん丈け 久「ちやつと行のんせ 雲「合点じや」ト向ふへ這入る」 久「
何の事じやかれ迄が」ト手桶持ち橋掛りへ這入る護篋引て取る返し
淺黄幕切て落す上手に辻堂並木の松所々にある 淨「リ」是や此行くも歸るも逢阪の關は昔

の名のみにて知るも知らぬも行通ふ京都大津の街道筋夜るは往來も途絶へしていと物凄さ
丑滿時「ト臆病口より追劔四人出て 追劔〇「奴か 追劔△「まぐるじやないか 追劔×「鼠の子が
一正かいらぬけたいな晩じや 追劔〇「まん直しに一服せうかい 皆々「よかる〜」 淨「腰か
ら取出す胸乱に十服つぎの太煙管遠き火影の小提灯ぶら〜浮世又平が妻の左枝は只一人
馴れぬ夜旅も孝行の道を急いで來掛ることな」ト向ふより左枝小提灯を燈支出て」 左「モウ
彼是八ッでもあらうかどうぞ早ういたいたいものじやが 淨「ろりやよい鳥と四人の衆向ふへ
廻つて ×「ユレ女中様此物淋しい街道こちらが送つて 四人「やらうかい 淨「聲かけられて
胸りのだくつく胸を押沈め 左「ホ、夫をマア忝うムんすが何貯へない身すがら錢金さへ持
て居にや怖い事はムんせぬわいなア ×「膽の太い事はさくぞよ 〇「かういふ形りが出るか
らは大概は知れたものじや ×「けふ宇治の開帳場で借てうせ九十兩の金どつくり暇んで待
て居るのじや 左「エ、〇「こまごといはすところこへ請出せ 左「あのいはしやんす事夫は大
方人違ろこ退て通して下さんせ ×「エ、面倒な引すり出せ 〇「合点じや〇「さ〜〜出しあ
がれ 淨「まぐるが手先を突込懐ろちやつと飛退き 左「マア〜待て下さんせ僅かなれど此
金は私がと〜様未進に詰つておと〜いからの水牢其苦しみが助けたさ宇治の伯父さんに借
つ〜戻つた此十兩是を上升てはと〜様の命がムんせぬみす〜親を見殺して私がおめ〜

生ゝては居られぬぞうど堪忍して下さんせ 淨「お情けお慈悲と手を合せ拜み廻るぞいぢらしき。〇「情けを知つて此商賣が成るものかい。×「細事ははずと出しさらせ 淨「渡せやらじと争ふ財布紐はちぎれてばつたりと落た包は以前の瓦。〇「そりや金じや」ト取て」。〇「ヤアこりや瓦じや 左「エ、〇「何のこつちや思々しい」ト打附る左枝取上げ」 左「本に瓦じや伯父さんから受取た小判いつの間にやら瓦に成てあるわいなア」 淨「見るより左枝は只うろく呆れ果たる斗りなり。〇「あう成たら仕方がない。〇「逆もの腹いせに蹴倒して取のめせ」×「合ッ点じや 淨「両手を捕つて無法の有様左枝は何とせん方もかいなに嘴付。△「アイマ、ハ、ハ、三人」ぞうした」 淨「隙きを伺ひ逃行くこづみ提灯はつたり眞の闇。×「サア提灯を消しあがつた。△「テモ素早い術妻め。×「サア皆来い」 淨「かしてを差て急ぎ行く左枝は漸う小影を出て暫くイみ居たりしが 左「けふはどうした悪目じやぞいなア命替りの其金いつの間にかやら石瓦中改めなんだがわしが誤り又伯父様があの様なものを下さんせう筈はない合点の行ぬ今宵の時宜又平殿やと、様にいひ譯は立もせうがと、様の命の瀬戸ユリヤマア何としたらよからうぞいのう」ト薄きろくに成り子役異形の拵らへにて左枝の後ろへせり上る 左「と、様を水牢させ子の身で見捨居られうかいつそ淵川へ身を投てさうじや」ト行掛け」 左「イヤ、くわしが死んだといふてと、様が水牢を助からしやんと

いふでもあるまい又平殿とも相談して」ト行うとして」 左「手延に成てはと、様の身の上マ一度宇治の伯父様に夫々〇ア是とも有り餘るといふでいなし貰ふた金は斯くくといふにははれぬ浮世の義理親子夫婦の義理詰めでわしや爰で死升ると、様こちらの人了簡して下さんせいなア」ト泣く此内辻堂の扉内より開くと南無右衛門廻國の形り寐覺の体にて見て居る異形の者椶の本に立つて居る 左「モウ明るに程もあるまい死におくれば耻の耻椶の本が冥途の道」ト抱へ帯を解き枝へふりかけ岩臺へ上り」 左「南無阿彌陀佛」ト死うとする南無右衛門駈寄り抱留る 南無右衛門「女中待た」 左「イエ、く放して死して下さんせいなア」ト兩人揉合ふ異形の子役消へる」 南「放さぬ」く早まるまいぞ」ト無理に抱かろし」 南「かれが出たら滅多に殺す事じやあいなぞや」ト燈籠を取て来て火打を出し火を打」 南「斯ういふ事もあらうかと宵に燈明はしめして置た」ト火を燈し」 南「此物騒な所へ女の泣聲伺ひ見れば椶の枝で首を釣つて死うとはよく」の事であらうが身に叶ひし事あらば力と成て助けたいシテ仔細はどうでムるぞ 左「おなたか存升せぬがお情けのお詞假令様子は語るども生て居られぬ私が身の上 南「サ、うこそが膝とも談合事の様子は何とでムるぞ 淨「様子如何にと尋ぬればこなたは猶も涙乍ら 左「私は大津の町で貧しう暮と者でムり升るがと、様が年貢の未進で此間からの水牢ぞうぞ其苦を助けんと金調へて戻り掛け盜賊に出合明け

た所が石瓦いつの間に取りられたとも落したとも言譯立ぬ此身の上作業にも才覺にも叶はぬ物は金故に死ねばならぬ此場のしぎ御推量被成て被下升いあア、南聞けば聞く程氣の毒な咄し然しマア待たつしやれ、海いひつゝ笈をこてくと明けて取出す小判の包み、南幸ひ用意の此十両、左エ、南千金にも替難いは人の命心置なく道はつしやれ、海投げ出す包み飛付て取らんとせしが待て暫し、左御深切忝うはムんすが近附でもない修行者様にどうマア是が、南然らば此金誤つて落し置ば拾ひ上て遣うとも貸に非ず恩に非ず、左ろんなら矢ッ張此金を〇エ、忝うムんすが死んでも忘れは置升ぬ、南イヤ、こなさんの孝行を感納あつて佛の賜物、左親子が命の御恩の金此身を粉に働いてもお返し申さにな成り升せぬマアお前のお名所を、南樹下石上と佛の教へ定まる住所といふはムらぬ今宵の恩を忘れずば親御へ孝行神佛を信心さつしやれ、左夫程にいふて下さんすを遠てお尋ねも結句志しを破る道理御縁もあらば、南又廻り合ふ事もあらう、左そんなら修行者さん、南女中、左か去らばでムんすが、ト行うとする四人戻つて来て、四人こりや街妻め、ト掛るを南無右衛門皆々を取て投げ、南此間に早う、左アイ、ト走り這入る、南餘ッ程山の根が明うなつた、トレかれもそろくやりかけうか、ト南無右衛門笈を擔げ花道へ掛る四人起上り、四人六部うぬ、ト取付くを宜敷あつて、南命をとるも無殘の殺生、四人何を、ト掛るを錫杖にて

當る本釣鐘、南なまひだ、ト向ふへ這入る四人追駈這入る臆病口より新吾旅形りにて三度笠を提げ出來り、新今打たは明六ッさうな存外運なはつた、ト行ふとする雲六出て行當り、雲お救され、新わりや長谷部雲六でないの、雲さういふろちは、新片岡造酒ノ守が身内正木新吾先達て佐々木の重寶百齋の一卷を奪取て逐電したる長谷部雲六尋常に腕廻せ、雲ちよこさいお新吾め悪くよつたらから竹割だ覺悟せい〇といふて逃たものじや、ト逃出すを引戻して、新さうはさ、ト雲六逃うとする立廻りあつて新吾つまづ、雲天の奥へ仕てやつた、ト走り這入る、新うぬ何國迄も、ト追駈這入る返し

造物二重舞臺見附赤壁是に大津畫張である真中に納戸口上手折廻り障子家体橋掛り塗垂辨店先に大津畫の入たる箱水鉢繪の具皿机筆立に繪筆さま、飾りある二重に南無右衛門腰のけ草鞋の紐解き居る又平盃をあてがひ居る鶏笛響の音にて道具留る、ト仕出し大勢行違ふ、海爰に土佐の末弟浮世又平重起といふ繪手あり産れ附て口吃り言舌明かならざる上家貧くて身代は筆の軸さへ細元手、又平ア洗はしやれ、南是は慮外、ト足を洗ふ又平草鞋を片附る事杯ある、海行來う旅人立留り、X正兵衛や評判の吃の又平が繪を買ふかいの、〇近所への土産にせう、〇イヤ四五枚見せて被下、又ド、さなたもはよ、X此藤の花擔げたおやまは何ぼじや、又ド、いせれでも、ト両手を廣げ、又モ、文、〇かりや鬼の念佛にせう

わい。〇「此髭奴にせうわい」ト銘々錢をつき。〇「サアムれ」ト向ふへ這入ると此内南無右衛門笈を直し其を呑み居る又平茶を汲で行。雪イ、一杯參れ。南「イヤ搦はつしやるな思はぬ御世話に成り升る。又ナ、なんの」南「噂の高ひ又平殿往來を相手のすぎはひ殊更繁昌見升た所が内室も見へず扱は獨り身でムるか。又ヒ、びもどもア、ある」ト二人乍らよそへ往たと仕方して。又「びた」南「ハア扱は他行でムるか。又ミ、びゆんべはド、ここで。南「夕へは逢阪山の辻堂に野宿致し爰元へ參つても明離れず茶の御無心に立寄りか世話に預り大にくつろぎ升る。又サ、幸ひけふはコ、志しのメ、命日へ、へかうしてム、下りし。南「佛事作善は六部の役佛前は何れにムる。又コ、爰じや」ト障子家体を閉る内に佛壇の明かし灯しある南無右衛門佛壇の前へ行き。南「位牌に刃劔の二字を入しは此佛も劔難の横死でムるか。又サ、さよイ、いちらしい事、仕升た。南「又思ひ出す爰派。南「出離生死頓生菩提南無阿彌陀佛」又「ヨ、ようへ、へかうしてやつてク、下されメ、飯はホ、追附けん、進せ升る。南「イヤ」必ずか心遣ひ無用でムる。又「ユ、ゆるりと」ト枕を持て行。南「暫時休足致さうか。又ソ、さうさつしやれ。南「御亭主後程逢ひ升せう。南「障子引立立戻り。又「コ、此噂めはモ、戻りさうなものじやが」ト向ふより娘おろり跡より庄屋野呂作出て。南「お庄屋様いかひお世話様でムり升。野呂作」はか／＼しう世話甲斐がなう

て氣の毒じや」ト本舞臺へ来て。リウ「兄さん野呂作さんを連立て戻つたぞへ。又「シヨ」庄屋どん、御苦勞。野「御免なされ罷り通る」ト草履を叩いて懷ろへ入二重へ上る。リウ「さうして姉さんは戻らしやんしたかへ。又「カ、噂めはマ、まら。野「噂めはまらとは何のことちや。リウ「ありや姉さんはまだじやといはしやんすのであらうな」ト又平點頭。野「そいつは難儀なものじやわい全体爰の内儀が金の才覺に宇治へ往たと聞てどうぞ片時成りと早う太右衛門の苦しみを助けて遣らうと又平を連て殿様へ願ひに往たけれど金を持て上らねばならぬと殿しい言附じやわいの。又「ハ、早う戻りくさつたがよいキ、氣が氣じやナ、ないわい。リウ「左枝さんも夜道の事なりや際も入らうモウ追附戻つていあらうわいなア」トレ茶々上う。南「とツイと立て汲出と炭花優曇華の花待得たる心地にて左枝が嬉しさ足も空とつかは戻る店の先き」ト左枝戻て来る。リウ「チ、姉さん戻らしたか。左「アイ」チ、お庄屋さん私しや道からあなたのお所へ參り升たので思はず際取り升たわいなア」ト又平左枝が手を取り二重へ引上げ。又「噂」野「何のこつちや舅の命に拘つてある一大事の場所殊に妹や此庄屋の見る前で噂しよ」とは餘りであらうかの。又「ナ、何をいはしやる噂しよびは。左「上首尾でムんす。リウ「金は調ふたかへ。左「小判で丁度十兩見て下さんせ」ト財布より出す。又「デ、出かしたなア」ト野呂作が頬をはる。野「アイタ、、ゑらい目

に合すなア「ト又平恟りして」又「ア、不調法」ト誤るこあし」左「此金に附て夫はく怖い
 事や又悦ぶ事悲しい事の數々 野「ア、コレ長咄しは跡での事ちやつと其金持て往て太右衛
 門を早う出して遣るが肝心又「ソ、さうじや 左「そんならか庄屋さんのお供して「リウ」早う
 往てムんせいなア「ト野呂作おりの」左「あなたのお召物が 野「イヤ爰にかわし升」ト懐ろ
 より草履を出して履く」左「こちらの人往て来るぞへ」ト又平點頭」野「そんならか内義 左「
 サアムらしやつて下さり升せ 野「悦び勇み出て行く跡はおど、ひ差向ひ リウ」兄さんはで
 お前も落附たでムんせうなア 又「カ、肩ナかりた リウ」其かりた序にあるこに六部さんの
 笈がかりてあるどうしたのでムんすへ 又「ユ、夕べはフ、藤浪が百ヶ日ソ、夫で留たリウ
 「本に何やら角やらに取紛れ忘れはせねど、おろろかに成てあるがようお前六部さんへ供養
 して下さんした去り乍ら一時も早う敵三八が行方を尋ねせめてかすり手成り共負はせたら
 夫が未來へ手向草 野「私しや口惜うムんすと流石真身の姉思ひ又平も打萎れ 又「ヨ、よう
 いふたヲ、追付ウ、討すナ、泣くなく」リウ「アイ」ト泣く」又「ナ、泣くぢやい 野「
 アイ」くくも共涙兄も心を取直し 又「ロ、六部殿が起られたらメ、飯をシ、進せ リウ「
 アイモウ起ていあつたか伺ふて見ようわいな 野「何の心もかい立て覗く一間は釣佛壇回向
 の鉦の殊勝成り」ト障子家体の内にて叩き鉦の音する」野「障子細目に妹も見るより恟り立

退て リウ「アノ六部さんは儘に 野「姉の敵の三八と思へばろいろ足も空又立寄つてどつく
 と見定め リウ「コレ兄さん 又「ヒ、恟リス、するわいリウ」恟り所じやないサアちやつと敵
 を討て」野「せき込む妹取て突限け 又「キ、氣違ひめユ、行方の知れぬイ、妹の敵リウ」
 知れてある」あの六部が姉さんの敵 又「ナ、く」なんと リウ「佐々良三八じやわいなア
 又「ヤ、やア 野「聞て又平あきれ顔 リウ「ちやつと敵を討たして」又「ガ、合点 野「妹も
 ありあふ出刃追取り帯引しめ身拵へ駈入らんとする所を 又「マ、待てセ、せいてはコ、事
 をシ、仕損する 野「すらりと抜て草履の嫉刃妹に叩き點頭さ合ひ奥の間さして」ト靜かに
 家体下手へ引き」野「小鮎を覗ふ鷲の足障子蹴放し踊り入りリウ」姉さんの敵 又「ヤ、やらぬ
 野「左右に別つて突かくるを思ひ持なき南無右衛門コハ狼藉と身を聞き抜つ潜りつ手だれ
 の勇者戻り掛つて女房が斯くと見るより恟り仰天 左「ヤア滅相な刃物三昧様子があらう
 マア待しやんせ 又「ド、どけ」野「又打掛るをかづき留め 南無右衛門」待て必定人違へ心
 を靜めて仔細をいやれ 野「いふ顔左枝は急度見て 左「ヤアお前は夕べの六部さん 南「誠に
 其時逢ふた旅の女中 野「是はしたりも耳へころ入らず兄弟一途の白刃と白刃せんはう鼓の
 箱追取しつかと押へ骸をのせ 左「コレ譯もいひす切つはツつ私が爲には大恩ある此修行者
 様あなたを殺す心ならわしから先へ切らしやんせ假令意趣あるお人でも譯もいはずに勝負

するはろりや卑怯でムんぞぞへ 淨「恥しめられて又平はさへる女房突放し疊叩ひて 又、イ、いもくエ、淨「せけばせく程舌縮り 又ト、どの 淨「敵は口へ出す五体を震ふ無念なき傍から女房が 左「コレく其様に氣をもむと得々いこんじやないかいなア 淨「どうぞ仕様は有合ふ繪筆祝と紙を機轉の女房 又「ガ、合点 淨「筆追取て墨黒に替下したる達筆を南無右衛門篤と見て 南「何々去る廿五日江州堅田の別業に於て白拍子藤浪を手に掛し佐々頁三八といふは其方であらうがなりう姉さんの敵 又「サ、尋常にりう勝負く 淨「勝負く」と詰寄つたり 南「ム、扱は藤浪はそちが妹であつたか斯成る上は包み隠す三八ならず如何にも尋常に勝負致して呉れうが藤浪を討たるは全く私の遺恨でない 又「又平筆取り書く」南「ヤアくいふなく意趣遺恨もあひ者を何で手に掛た○是には段々様子のある事ト又平書く」南「さういふておれを欺し此場を逃うとはイヤ其手はくはぬ○イヤ全く未練でない主人への忠義家の爲ト又平又書く」南「其か主が寵愛をさつしやる妹を討て忠義立も凄まじい但し桂之助がいひ付たか○イヤ全くさうではト又書く」南「外に言譯の証據があるか○サ夫は 三人「サアくく」ト又書く」南「立上つて勝負せい 淨「又詰かくるを南無右衛門飛とさつて 南「尤道理じやが討るゝ共仔細をいひたる上の事 淨「言聞かさんとどつかと坐し 南「御主人佐々木桂之助様藤浪が色香に迷ひしより事起て百蟹の巻物紛失

此三八は大殿のお供大殿討死の様子注進に立歸り始めて聞たる若殿の御身の上久次公使者を以て藤浪を無跡の所望又若殿はお身に有へて惜み給ふ殊に上意の御縁組銀杏の前をお嫌ひあるも元の起りは藤浪故是非に及ばずト殺したといふこなし」南「サア我も妻子を持たれば夫婦の恩愛我子の不便さ知らぬにもあらぬと弓矢取る身の情なさせめて佛果菩提の爲僧法師ともなるべけれど紛失のお寶を尋ね求めお家再興する迄はと廻國修行の南無右衛門斯く本心を明す上は身共を討て藤浪が修羅の妄執晴らされし上寶の詮議頼み存する 淨「一部始終の言譯を聞けといつかかなひるまぬ又平 又「ソ、そつちの勝手がワ、悪いてト、科あいな妹ナ、何で殺したセ、せめてシ、しぶり皮などム、むいてこまさにヤコ、此ム、虫が得心せぬわい 淨「もたへあせるを女房抱留め 左「尤じやがあ六部さんに刃向ひさしやんすと思も義理も知らぬわいなアコレト胸ぐら取て」左「マアわしがいふ事を聞たがよいわいなアト引すへる」又「ナ、何じやい 左「サアさのふ宇治の伯父様に借つて戻つた金十兩片時も早うと足も空此間から此金故に幾世の苦勞ア、嬉しやと氣がゆるむとぎつくと胸へ差込んで常からお前も知つての通り氣を取失ふて持病の癩六地藏の祖母様が介抱に漸らどつかへも治り鳴るは夜半を告げる鐘辰り掛つた逢阪山追剣共が無利に私の懐より引出す財布の内から思はず落たハ瓦桐りせまいる爺様の命の瀬戸際助ける金何と言譯あるもの

を首纏らうとした所助けて下さんした六部さん再びある悪者共を追散らした其上には
 つかりと下さんしたのは小判十両爺様斗りか私迄命の親の六部さん此大恩を報せぬのみか討
 てお前の手柄に成るか妹御への追善には私を殺して無事此場を納めて下さんせいなア
 淨「命と義理と金の恩我身を捨て立て通す心の誠どけなげなる何思ひけん又平は笈に掛た
 る天蓋を二ツにさつと切落せば三人横手を丁と打 南「ハ、誠や晋の豫讓の例しに習ふ即座
 の討らひ 左「そんならお前も得心で 又「チ、恩を知らねばイ、大同然 左「エ、嬉しうムん
 すわいなア 淨「又平は涙片手に佛壇の位牌に並ぶ舞扇是ぞ片身と取りおろし生きたる人に
 いふ如く 又「コ、コリヤ妹よ、よう聞けよ 淨「われを討たは國の爲お家の爲とある上に
 タベの金の恩といひ何と刃が合されう 又「マ、マ、愛の道理を聞譯て迷ひを晴らして
 呉れよかし 左「チ、尤じやが夫も何故浮世の 右「義理といふ字は誰が手初め 又「イ、今
 の憂目を 淨「ミ、見せるぞと位牌を中に三人が互に手に手を取り替まもたへ歎つて道理成
 る折柄さつと吹送る風かあらぬか雲間の鳥此家の棟に舞遊ぶ南無右衛門三人に向ひ 南「過
 去前世の因縁にて思ひよらさるけふの面會一所修行の不自由の身なれば最早此儘お別れ申
 す 左「お泊め申に申されぬ大切な寶の詮議 南「譯てお頼み申置くは桂之助様の御身の上御
 浪々の其内に若し此邊りへお越しあらば御夫婦共に御介抱 又「ソ、其義はチ、ちつとも氣

遣ひあるな 左「エ、ついとモウ辛氣な「ト鼓を取てヤアと打紀念の扇を取て」又「妹が爲に
 も御恩の殿様身こそ墨繪の山水男紙表具の体なりとも夫婦が誠の一心は朽ても朽せぬ金沙
 子 左「唐繪の樊噲張良を 又「楯についたと思召しチ、お心置なうタ、寶のチ、御詮議 南「
 ホ、頼母しや我は是より丹州へ御縁もあらば又重ねて 淨「お去らば去らばと出て行く足元
 空よりばつたりさのふの金 「ト南無右衛門取上げ」 南「冥加金十兩宇治の里百姓太次兵衛
 左「ろりや伯父様に貰ふた金「ト追剣〇△伺ひ出て」 二人「其金を「ト掛るを立廻つて」 南「天
 道は明らかを「ト金を左枝の前へはうる」 左「此儘おなたへ 南「イヤ藤浪か吊ひ料「ト二人
 を投げる又平金を取上げ」 又「りう、シユ修行者へ 左「けふの手の内「ト又二人起て掛るを南
 無右衛門錫杖にて押へ」 南「去らば「ト又平二人と立廻つて取て押へ」 又「イ、入れ升せう
 「ト右の金を差出す南無右衛門松虫チヤント鳴らす引はりにて宜敷拍子幕

四幕目 朝顔庵山三徳住居の場

役名

- | | | | |
|----|------|----|------|
| 一名 | 古屋山三 | 一中 | 間猿次郎 |
| 一禿 | もじの | 一同 | 鹿蔵 |
| 一時 | 計屋若狭 | 一葛 | 城太夫 |

一大丸手代彌九郎

一仲居お宮

一香具屋小兵衛

一家來大勢

一仲居お岩

一駕屋

一棋の局

一廻し喜助

一瀬川采女

造物三間の二重見附金襴極彩色の畫破損したる体東西落間筋扉是も崩れたる書割舞臺前朝顔の盛りいつもの所に草井戸松の皮付の枝折戸能所に風爐是に一升釜水置の心走り招鉢組板杯並らべ二重に山三縫摸様の女形の着付男帯を前にてとさみ脇息に掛り本を讀んで居る猿次郎なまこるり合羽一ツにて門口の傍に錢さしを拵らへて居るからさは歌にて幕開く猿次郎此兄貴もモウ戻られさうなものじゃが山三然るに母万江十郎祐成を膝元近く招き寄せ泣々いひける様はかことが父河津殿未だ世にまし升内に仰けるは猿モシく若旦那本計り讀んでムつては結句お氣が盡升せうマアお葎でもお上り被成升せ山いか様一服吞んでうさを晴さうかト葎盆を引寄せ山コリヤ火がないぞよ猿サア入升せうにも肝心の火がムり升せぬもの山何火がないとは猿何の今迄ムり升せう昨日の葎たいた儘だものドンか待被成ト火打箱を取て来て猿打て上せうト火を打つて猿サア是で召上ら

れ升せう山チ、太義くト葎を吞む下手より時計屋香具屋出て來りて時計屋御免被成朝顔庵とは是でムり升るうな猿チ、愛じや何ぞ用事なら這入らせト兩人内へ這入る山チ、是は時計屋若狭香具屋小兵衛も太義く時先達てか誂らへの柱時計葎か好みの簪拾五本時持參致し升て兩人ムり升る山ドンく是へ見しやれ兩人へいト風呂敷包みより簪の箱入時計を出し時斯う見升た所が旦那様には御風流なか姿でムり升な香儘に彼の君が移り香を肌身に添へてといふ様な事でムり升せうな山コリヤ少し大ふりに見へるな時イヤお誂へ通り致し升た簪でムり升るが山簪は氣に入つた追々仕立てくりやれ夫二人とも彼に金子受取つて立歸れ香へい奴様鼈甲木地手間代とも一兩二朱宛十五本で十六兩三分二朱でムり升猿ヤアアノ十六兩三分二朱かト胸りする時ハイ私の方の時計は四十三兩でムり升猿何じや四拾三兩じや香中々外々ではこんな直段では出來升せぬ山猿次郎やつて仕舞へく猿へイヤやる事はやり升がチ、さうじや金子とけさ兩替屋で二百兩斗り取て歸らうと存升たが大騒動でムり升兩人そんな事じやの猿イヤモウそんな事のことんな事のことんな事じやない兩替屋の亭主が子を産み升た香エ、ろりや内義でムらうがな猿サア夫が亭主が産だから乱さわきた兩人いか様猿所で番頭が追付夫へ持たしてやり升との斷り二人とも金子の明日でも請取に來て下され

香私も職人の手間取り共は日々の勘定せんからか金頂き升迄マア代出物はか預り申て歸り升せう 山「ハテ高が甘阿にたらぬ金鹿相はないわい 香「へい「ト向ふより葛城傾城他所の形り仲居お岩禿跡よりおちせなまこ襟にて付添出て」 岩「太夫様モウ向ふが朝顔庵でムり升ぞへ 葛城「早うおじやいのう 喜助「サアお出被成升せ「ト此内山三時計を掛けて居る皆々本舞臺へ来て」 喜「御免成さい 岩「サ、是は葛城殿ようこそく「サアく「這入らさつしやり升せ 喜「大事をいかへ 山「サ、太夫か爰へく「 葛「山三さんよう内に居て下さんしたなア「ト皆々内へ這入る」 山「サ、モヒのか能く來たなア 禿「爰の内は奇麗な様できたない内方様じやわいなア 岩「ア、コレそんな事いはぬものじやわいなア 山「ハ、コリヤもじのがいふ事が尤じや元此朝顔庵の足利義種公のお好みの茶亭にてあの如く朝顔あまた植へ玉ひ朝顔の名はうつくしく暮るどもしばまぬ色のあらまほしさにと一首の歌の感應にてア「見や今の世に至る迄畫であらうが花の詠め 喜「何と妙なね咄しではムり升せぬか 喜「さういふ不思議もあるものうして伊勢の國の白子櫻は咲も終らず散も始めず不斷櫻の名を残す 山「然るに大領久吉公北山の金閣寺東山の銀閣寺になぞらへ此所を御再興有て度々いらせられしに千の利休刑罪にあふての後は荒果てし舊跡ゆへ奇麗な様でひさい様な因縁は此通じやわいの 喜「したり夫でさらりと分り升た 香「時「イヤ分らぬはこちらの事 喜

ハテ何事も吞込んでおるお客もある故後方取に來てくりやれ 時「ろんなら後方 喜「承知だく「 香「私の方の間違ひぬ様 時「そんなら旦那様 香「奴殿 喜「サ、太義く「ト兩人下手へ這入る」 喜「時に何ぞ御馳走が申たいか何をいふても「トこなし」 喜「イエ殿達計りの事なれば御不自由にあらうと思ふて仲居のお宮殿に頼んで置たものがムんすモウ見へさうなものじやが 喜「お持たせとは有難い一寸道迄「ト向ふを見て」 喜「ヤア敷際をまがつたは儘にお宮〇サ、イく「ト戸屋の内より」 喜「サ、イく「トお宮蒔繪の提重を風呂敷に包み出て來る」 喜「最前から太夫殿が待て居らるゝわいの 客「サア氣はせいたれど今日は月見の大寄せでお客だらけ夫故 喜「サット其いひ譯は跡へ廻して早うく「 喜「サ、せわし「ト兩人内へ這入る」 喜「帯様太夫様堪忍して下さんせ 山「イヤく「いそがしいよ太義く「 喜「今日は目出度い月見の御祝儀私が來たは夫婦打揃ふて盃を傾けるといふ心宮さん披露して下さんせへ 喜「アイく「ト風呂敷を開き」 喜「上一重は月見の御祝儀中むつまじう妹脊の盥湯でおまめなやうに豆の粉の堅いしく「いつ迄も替らぬ御酒は友白髪めで鯛の盥焼に追付やゝを玉子のにぬきサア帯様からか一ツお始め被成升せ 喜「本にいつてもつべこへと 喜「ろこで私はしやべりのお宮山「然らば身共から始めうの 喜「さらばお酌を致し升せうか「ト酒盛りになり」 山「コリヤく「猿次郎兎角ウいふ内夜食時分用意は調ふたか 喜「へ

イ先刻出掛けに兄めに申付置升たが一寸おひつの脉体を伺ひ升せう「トかたへの飯ひつを明けて」猿「南無三底に一粒もムり升せぬ」山「ハテ扱不埒千万な早く用意致せ」猿「チイ／＼」ト立うとするを」猿「ア、コレまゝなら私にたかして下さんせいなア」宮「太夫様まゝ焚く事知つてかへ」猿「サア焚た事はなけねど猿次郎様にかしへて貰ふて焚て見るのも楽しみではないかいなア」山「成程是も一興猿次郎其方傳授致して遣はせ」猿「そんなら米を取つて参り升せう」ト奥へ這入る」宮「サア／＼此風呂敷を前垂にして」ト帯へ挿んでやる」猿「たすきは私が下ぐり」ト山「三手拭掛の手拭取つて」山「ソレ是を斯う冠り」猿「アイ／＼」山「此方も遊んで居すと」宮「チットあなたはおむしをお摺り被成升せ」山「こりや手にあひさうな事じや」トお宮皮包みとすり鉢杯をあてがう奥を猿次郎紙袋に入れし米を持出て」猿「さらば米を出して参つた」宮「コレ肝心の割木が一本もないぞへ」猿「そんなら隣りの後家様の所へいて一把借て來う味噌を摺るならそこらにうかしの大根がある筈じやエ、此せわしいに兄貴はどこへうせた知らんどレ一走りいて來うか」ト下手へ這入る山「三不器用に味噌を摺り掛ける」猿「此米とどうするのじやへ」宮「夫は此桶へ入れてかう／＼して」ト教へる葛城其通りにして居る」猿「お岩殿モウ是でよいかへ」猿「コリヤ水を入すかいなア」猿「そんなら水を入れるのかへ」宮「アノ桶の水を入れさんせいなア」猿「アイ／＼」ト桶を取つて來て

猿「コリヤ水がないわいなア」宮「帶様井戸はどこでムんすへ」山「ツイ表にある」猿「ソレ釣瓶じやぞへ」猿「アイ／＼」ト井戸の側へ行色々しても水の汲れぬこおし」猿「お宮殿／＼とんど水が汲れぬわいなア」宮「本に不器用なかうしたら何でもない事じやわいなア」ト汲上る水が入てない故」宮「チ、辛氣ねつからこりや汲まれぬわいなア」トくるまきの心にて色々汲んでも水の這入らぬこなし猿次郎割木を一把かへ出て來る」猿「サア／＼割木の工面が出來た」宮「チ、よい所へ猿次郎さん此釣瓶はどうしたら汲れるぞいなア」猿「くるまきと違ふて振釣瓶はチトむつかしいドレ」ト水を汲む」猿「本によしたもののじやなア」ト靜に兩車」猿「エ、情けないまたば／＼とおいでるさうを」宮「内へ這入らしやんせいなア」ト此内猿次郎家根板をばづし取焚付にして釜の下を焚き付る兩車はげしく二重舞臺とも糸雨ふる」猿「サア／＼又洩りくさるは」宮「アレ愛からも洩るマア是なりに」ト摺鉢を請る」山「太夫もこつちへ寄つて居や」猿「こりやけうとい事じやわいなア」山「猿次郎いかに致さう」ト猿次郎紅葉傘の破れたを出して」猿「若旦那と太夫殿は相合傘でそこらへ立てムれ」山「こりや能く氣がついた」宮「私等も傘加して下さんせ」猿「私もぬれるわいなア」猿「傘といふたらあれ一本はかきいもの」皆々エ、猿「イヤ思ひ付た」ト襖をばづし」猿「サアこれで三人相合襖」宮「是をどうするのじやへ」猿「ハテ此襖をさし上げて其下へ這入て居たが

よいわい 皆「テ、笑止 蕪、おいらも何ぞナ、有ぞく」ト大盃を取て来てかむり」蕪、かうした所は化物屋敷があされるわいハ、ハ、」ト本鉄砲の音する皆々悔り」山「ヤア今のこと何じや」ト猿次郎底の抜けたる釜を取つて来て」蕪「水を入すに焚たど見へ釜の底がぬけた音でムり升 宮「私じやまた雷かと思ふたわいなア 禿「こんなこわい所に居ようよりいにいわいなア 山「こりや尤じや裏の待合は是程に漏るまいのう 蕪「いか様是程にはムり升せぬ 宮「どうぞ早う此苦が助りたいわいなア」ト襖を持って居る下手より鹿藏こもをかむり出て」鹿藏「ハッ旦那へ申上る御殿より奥女中様のお局様只今是へお越しでムり升 山「思ひもよらぬお局のお入り 蕪「私が居ては悪さうな事 山「暫らく奥の待合で 蕪「其風呂敷など冠つてムれ 蕪「ろんなら皆一所に 宮「世の譬にもいふ通り虎狼より 蕪「ヤア 蕪「もるぞ恐るしじやなア」ト皆々奥へ這入る」鹿「若旦那お出迎ひ被成れすば成り升まい 山「猿次郎羽織 蕪「ハイ」ト羽織を着せる下手より雨具の侍二人次に旗の局着附荷ひしごき屋敷風帽子塗下駄家來長柄さしかけ次に采女下駄蛇の目の傘家來付添挾箱持合羽掛よて出て來る山三傘をさし鹿藏はごき猿次郎はたらいをかむり出迎ふ」山「流浪の山三が茅屋へ思ひもよらぬ今日のお成り先々あれへ 旗の局「イヤ采女殿 采女「イヤ」 局「然らば通り升せう」ト内へ這入る家來傘を取らうとする」鹿「矢張其儘お通り下さり升せう 蕪「家内はだゝぬけで

ムり升る 采「是はけしからぬ」ト兩人下駄ばきの儘二重へ通る」山「御覽の仕合せ眞平御免下さり升せう 局「江州佐々木家の家人名古屋山三とは其方よな自事は聚樂の大奥を勤むる旗の局 采「久吉公の昵近瀬川采女といふ者久吉公の御内意に因て出向ふてムる 山「恐れ乍ら御内意の趣仰聞られ下さり升せうならば 兩人「有難う存じ奉り升る 局「近頃千島の守殿洞ヶ嶽の閑居に於てそちが弟三平に仰せ有りし佐々木の治り忠孝の道全き返答今に於て延引に及ぶシテ紛失の寶手に入てムるか 山「ハッ草を分つて詮議致せど未だ手掛り逆も取り得升せぬ 采「來る十七日と秀吉公肥前名古屋表より御歸陣早速御朱印御見覽に供へすば佐々木の家は相立まい 山「山三が五躰はさけたいる、逆も 局「詮議して差上げるか 山「寶の詮議が敵の行衛忠孝ニツは車の両輪 局「何れを捨て何れを取らんや 山「仕かゝせて見せ升せう 采「山三近う」ト帛紗包みの小柄を出し」采「此の小柄は千島の冠者か心を籠められし其方へ音物」ト山三頂き」山「忍ぶを彫り付しかうらざしを下し置れし千島の守様 采「賢を賢とし色にかへよとは古人の金言 山「スタヤ山三めが色情に 采「溺るゝにはあらねども移り易きは人心 山「朱に交れば赤きに染る 采「又文字に改見れば 山「忍ぶといふ字は刃に心取も直さず武士の魂 采「唐土にての漢の韓信 山「いか成る耻辱を蒙るとも 局「堪て忍ぶがそちの忠節 山「お志しの賜物有難う頂戴仕つてムり升る」ト兩車糸雨止む」鹿「嬉しやどう

やら降る雨も 山「虚名と俱に晴れ渡る 馬「朱印の有所 山「敵の行衛 馬「山三吉左右待て居るぞや」ト表へ出て」 馬「ハテ荒れ果たものじやなア」ト下手へ這入る」 猿「只今の御内意では 鹿「手延にならぬ御朱印の詮議 山「今宵の内は過されぬわい」ト葛城すいと出て山三の前へすはり」 葛「山三様私を手に掛けて下さんせ 山「ヤ何と 葛「是此假名本の曾我物語は丁度今のお前が身の上 山「すりや身共が心の内を 葛「サア大事を聞た此葛城聞入て下さんせまばいつろ私が」ト有合ふ出刃にて死うとするを」 鹿「待つしやれ今死るは犬死であらうぞや 葛「エ、鹿「今いはしやつた曾我物語の引事十郎祐成は若旦那 葛「鬼王に鹿藏殿 鹿「猿次郎に才三郎 猿「其十郎の取も直さすこなたの身の上誠の五郎見ぬいた故改て若旦那がお頼み何と頼まれては下さるまいか 葛「假令どの様なお頼でも命一ツを的に掛けたら仕おしせぬといふ事はムんすまいさうして其お頼みとは 山「手引がしてはしい 葛「何手引とはへ 山「親人が御最期迄所持被成れた御朱印の有家の則敵の手掛り 葛「エ、鹿「日外弟が手に入たる密書の宛名關といふ字の儲に不破伴左衛門 山「夜毎くんに廊へ通ふも若志やと思へど証據もなく仇に月日を送る内今宵についまる寶の有所其方の働らきにて詮議の手掛り取り得るならば身共へ貞節二つにはお家へ對して拔群の忠義 葛「お身の一大事を打明けて下さんすは嬉しいとも忝いとも殊に佐々木のお家は深い由縁のある私詮議の手掛り取り得

てお渡し申升せう 鹿「チエ、忝い 葛「チ、何のお禮に及ぶ事か夫トのお爲命にかへて受合升た追付吉左右知らせ升せう」ト下手より駕屋出て」 鹿「葛城様是にムり升るか」ト奥の方皆々出て」 宮「太夫様モウ日の暮れるに間もあるまいぞへ 若「幸ひ駕も来たさうな 葛「サアいぬるはいぬるけれど」ト山三へこなし」 鹿「先お歸り被成後程下郎めがお供して参り升へ 葛「そんなら私は先へいで 猿「今のお返事を聞がてらお供して参り升」ト葛城駕へ乗り 葛「山三様どうで今宵は大騒ぎ品に寄たら」ト心意氣」 山「必ず酒を過すまいぞ」トうりきにいふ」 宮「何じややら千年も別れる様にお前もたしなんだがよいわいなア帯様爐の炭ついで待て居升ぞへ鹿藏さんお前もちつとお供して廊の土も踏しやんせいなアチ、肝心な事を忘れうとした」ト簪の箱を取つて」 宮「そんなら此簪は私等が預り歸り升ぞへ」ト矢張唄の合方」 宮「八月十五夜の月見の御祝儀俳名書で水引かけて女郎様方に届けて來やうサア駕屋やつて下さんせ」ト皆々向ふへ這入る」 鹿「何じやかのれ一人しやべつて居さる」ト下手より大丸屋手代男に風呂敷を脊負はせ出て」 大丸「へい大丸屋でムり升お誂らへの衣装羽織持參致し升てムり升又揃地の反物は夕方に持て参り升る」ト紙包の着附羽織を出す」 山「チ、太義く、大「どうぞ代金を頂き度うムり升 山「夕方一所に渡すであらう 大「左様なら置て歸り升」ト引返し這入る」 鹿「若旦那葛城殿の返答次第 猿「彼の關と申侍が敵伴左衛

門に極らば 出「朱印の詮議敵の手掛り 塵殊に一味のかたんの大勢 山「山三が一世一度の
噴業 蕪「我々逆も命限り 出「ナ汝等が兼ての用意ハ「ト兩人脇差を取出して」 出「柄糸は
切れたれど 蕪「ねた刀は兼て「ト刃をぬいて」 兩人「斯の通り「ト双方が見せる山三是を見
るこなし此引張宜敷拍子幕

大 詰 〔大上〕 林 口 殺 しの 場

一 禿	居	ま	げ	り	一 大	鼓	持	彌	八
一 仲	居	お		岩	一 同		万	八	
一 同		お		三	一 土	子	泥	助	
一 同		お	も	ん	一 笹	野	蟹	藏	
一 同		お		玉	一 長	谷	部	雲	六
一 同		お	て	ふ	一 犬	上	雁	八	
一 同		お		灘	一 狩	野	歌	之	助
一 同		お		葛	一 妹	か	り	う	

一 同	合	お	傳	助	一 奴	猿	次	郎
一 香	具	屋	小	兵	一 不	破	伴	左
一 上	林	清	右	衛	一 奴		鹿	藏
一 吳	服	屋	十	左	一 名	古	屋	山
一 傾	城	葛	城		一 啞			三
一 仲	居	お	宮		一 盲			人
一 時	計	屋	若	狹	一 古	手	屋	一
一 太	鼓	持	頼	八	一 駕	身	大	勢
一 同	袖	八			一 立	廻	り	大
								勢

造物平舞臺見附長暖簾東西中二階能所に手水鉢燈籠いつもの所に門口上林と書た掛行燈懸
ぎ歌にて幕開く「ト方々にて手なるアイ、と長返事する奥方」 天上「イヤモウいけぬ」 「ト
酔たるこなしにて出て」 犬「仲居は居らぬか水一ツばい呉いよア、やくたい」 「ト横に成
り」 犬「ユリヤ枕持て来いよ」 「ト寐ると橋掛りる傳助飛脚の形りにて首に状箱をかけた掛
行燈を見て」 傳助「かんばやし爰だ」 「ト内へ這入り」 傳助「頼まうぞよく」 といつ返事せ

ないか」ト友藏を見て」傳「あれに寐て居らるゝは儘又犬上雁八殿幸ひ」ト起さうとしてこなし有て鯉口を鳴らし門口へ出て見合せ居る犬上構はず寐て居る故又内へ這入り」傳「ハテけしからぬ寐といわろだ」中々此様な事で起るゐるではない」ト耳の元に口さしよせ」傳「犬上雁八殿」ト犬上恟りして起上り邊りを見廻し胸撫で下ろす」傳「お目がさめ升てゐるか」ト犬上漸う心付たるこなしにて顔にて行とする傳助表へ出る犬上手水鉢にてうがい杯して手拭を取りちよいと冠り邊り見廻し表へ出て」犬岸田殿の家來河合傳助何事じや」傳「ハッ伴左衛門殿へ火急の密書」犬「コリヤ」傳「コリヤもすさまじいお前太抵床といふ人」犬「エ、八釜しいわ」ト犬上は傳助を連れ内へ這入り」犬「邊りに心」ト釣り燈籠へかゝり狀箱の狀の封を切らうとする」傳「そりやそこ元様へ參つた御狀でハムらぬわいの」犬「いゝ様コリヤ伴左衛門への密書シテ其子細其方は存せぬか」傳「先達て伴左衛門殿のお手に入たる一万町の御朱印佐々木家の浪人共嚴しく詮議致す由」犬「モウよい」委細はコリヤ」ト「呷く」傳「スリヤ未だ此所へは」犬「コリヤ何にもいはずと奥へ來」ト犬上は傳助を連れ奥へ這入る葛城衣装襦に改め葎盆を提げ奥へ出て邊り見廻し」葛「義理あると、様の忠義の爲此身を苦界の憂動め山三様に馴れ染て苦勞をそるも御朱印の詮議はやつぱりお主へ奉公眞實産みの二親はお名さへ知らねばお顔も見す藥の上から手盥にかけ育て上て下さんした

と、様噂様と弟に死別れ便りないお身の上責てお傍に付添ふてお世話に成た百分一お方に成る事さへ叶はぬ憂身の籠の鳥本に因果な身の上で有る程にの」ト戸家の内にて尺八の音する」葛「もあかの秋の月代を徒らに泳んより此身の願ひ二親の無事を祈るが身の冥加不淨を拂ふ伽羅の一トたき」ト香包を出し葎盆の火入にて香を炷く向ふ伴左衛門虚無僧の形りにて出て右の香氣に心を付け花道に立留り」伴左衛門「源氏六十一種の中に頭の中將向ふ宮兵部卿親王より賜はりし眞那盤を花の縁と名付く斯る遊里に珍らか成る一吐きはハテやさしさ香の薫りじやよなア」ト本舞臺へ來る」葛「笛の調らべは鶴の巢籠り鳥でさへ子故に迷ふは親心無やと、様か、様か思ひ出しては」弟文彌が追善に梵論寺殿へ少しの布施物」ト香包を鏡臺の鏡の蓋へのせ門口へ往て」葛「たきさし乍ら志しの香御受け被成て下さんせ」伴「逢阪の軒の清水にかけ見て」葛「エ、」ト伴左衛門葛城が手をじつとこる」葛「ア、申りに内へ這入り」伴「ハテあてやかな者じやなア」葛「ホ、、人を衛ながらすやうな事ばつかり」ト行うとするを」伴「太夫待ちやれ」葛「エ、」伴「ハテマ下にお居やれさ」ト引すへる」伴「葛城なせ其様に心強うはして呉るぞ桂の里の螢狩フト見染たが思ひの種通ひ廊の長枕一人寐をさせて呉るは餘り胴欲で有らうぞよ」葛「其様に思ふて下さんすお志し嬉しいは嬉

しいけれど 伴「間夫とやらへ操が立ぬか 葛「ハテ間夫といふもやつぱりお客其お客の内でおれは間夫おれは客と合点がいかんしたら廊に草がはへるわいかアお前でも間夫にならうと客にならうと心からとて身はいやしけれ關さん何とさうでこゝんせぬかいなア 伴「ハテ聞所ある一言若又身共が心有て 葛「サア其心にも様々惚た顔せぬ負惜みひらたう口説上手さかし人の心は千差萬別つゝまる所は打解けて誠の心の下紐を解さうと結はさうと向ふのお方の心次第 伴「ム、さう聞けば四角な玉子も 葛「万更ないでも有るまいぞいなア 伴「面白い身受せう 葛「エ、 伴「身が宿の庭に移せば主有る花人は手折らず 葛「イ、エ手に取るな矢張り野におげんげ花 伴「苦界を通れ身儘にならとも 葛「心が解ければ詮ない仇花 伴「其心のとけ様は「ト葛城つと立て」 葛「ろりやお前の爰に問はまやんせ 伴「何と 葛「關様後にへ「ト奥へ這入る」 伴「是迄様々に口説けども取り合はぬ葛城太夫どうやら今の五音では詞に汁氣がないでもないわい「ト奥より仲居かもんお三出て」 葛「ん、關さん今お出被成たか 葛「三待兼て居り升たわいなア「ト伴左衛門是に構はす」 伴「只迷ひの止め難さと吉田のひじりが筆のすさみ 三「サアちやつとアノ中二階へ 葛「ん、お越被成升せいさア 伴「誠に戀は曲者じやよなア「ト伴左衛門上手の中二階へ這入る向ふは鹿藏黒とんの上に不都合成る衣装羽織深編笠にて出る跡は名古屋山三衣装羽織大小ぶらり提燈を竹に付け編笠を着て出

て戸家際に立て居る鹿藏啞と行違ひ様に小尻を當行うとするを引戻し懷の紙入を引出す啞は腹立る中改め元の通り懷へ入てやる啞は戸家際へ行山三に行當らうとする山三身を開くと見事にひつくり返り戸家へ這入る盲袴宗十郎頭巾にて鼻唄うたひ乍らとぼく花道へ來る鹿藏又行當ると 葛「アイタ、目明さが目くらに行當るといふ事が有ものかい「ト鹿藏引起してやる」 葛「是はいかひお慮外さん杖を忘れ升たのでエテ目明さと取り違へられます○あんまけんび三「ト向ふへ這入る鹿藏戸家際へ立戻り」 鹿藏「若旦那あなたは上の町を山「コリヤ聊爾して過ちすな 鹿藏「承知致し居り升る 山「心を付い「ト戸家へ這入る奥方傳助出て」 傳「ヤレ嬉しいやく關大盡といふが伴左衛門殿一万町の御朱印をあのわろが所持してムれば此お返事を御渡し申さば御主人にも無御悦び「ト下手の中二階を明け此様子を葛城聞て居る」 傳「とはいへマ一度雁八殿に「ト振返る葛城障子をべる」 傳「更けぬ内に急やぐさ「ト花道へ行掛る鹿藏やり過して小尻返しにひしぎ付る」 傳「ヤイ、コリヤ何とひるぐさ「ト鹿藏傳助が首に掛たる状態を引ツたくる」 傳「ヤアうぬい「ト寄る所を當る本舞臺へ來て状態を打割り掛行燈にて状態を讀まうとする傳助ウンと起て」 傳「うぬに渡してよいものか「ト兩人奪合ひの立廻りの内狀を引ささ鹿藏當名の所をくつて吞込み此拍子に傳助を蹴倒す」 鹿藏「南無三といつふりくさつては面倒だ「ト引起して活を入れ」 鹿藏「さう

だ氣が付たか早く歸れ「ト花道の方へ突やる傳助ひよろ」と向ふへ行く山三戻つて来る
 身をよけ後ろざまに傳助を戸家の内へ蹴込み本舞臺へ來り」山「鹿藏でないか 鹿 若旦那斯
 様な一書が手に入升た「ト右の狀を出す山三取て」山「何々御内意の趣委細承知仕候然ば右
 の一品彼方より色々詮議仕るよし仰せ被下委細承知仕候○コリヤ見覺への有る手跡シテ此
 跡は鹿サア此跡の〇たべて仕舞た山「何をいつても肝心の宛名がなければ証據にもならぬ
 殊に文面も定かならねば 鹿お役には立升せぬか 山「イヤまんざら立ぬ事も有まいマ、何
 にもせよ肝心の 鹿葛城殿の今日の返事 山「篤と實否を聞た上「ト兩人本舞臺へ來て」 鹿
 頼まうぞよ」 濟左衛門「ハイ」ト奥より出て」 濟左衛門「仲居共はここに居る」ト門口へ
 來て」 濟「おなたじやこつちへお這入被成升せ 山「イヤ亭主身共じやわい」ト頭巾を取り内
 へ這入る」 濟「是は帶様おなたじや知らぬと存じ升たコリヤ仲居共帶様がお出被成たぞよ
 仲居皆々「アイ」トおてふお岩お雛お玉お三おもん奥より出て」 おもん「帶様今宵は遅うム
 んしたなア 皆々「本にきついおもたせぶりじやなア 山「據ない用事に取紛れ遅參致した赦
 しやれ」 おもん「本に先程は宮殿のら結構な簪をおくれ遊ばして 皆々「有難う存じ升 山「
 イヤ禮いふ程の者ではない見れば同じ摸様の衣裳を着て居るはおもん「ハイコリヤ關さんか
 ら頂き升た揃ひでムんすわいなア 山「身も月見の祝儀に揃ひを致してやらうと出入の吳服

屋を呼びに遣はしたれば追付是へ持參致す有らう 皆々「夫は有難う存じ升る」ト鹿藏は
 聞てびく／＼する」 濟「コリヤ早うお盃を持て來んかいやい 皆々「アイヤイ 山「ア、待て
 今宵は名月爰で酒宴とは曲がない 濟「いかさま是はあやまり奉り升た東二階を明け放
 し燭臺入らすのこつふ酒 山「サ夫でなければ夜が明ぬ 濟「ソレ仲居共 皆々「サア行かしや
 んせいなア」ト皆々下手中二階へ這入る鹿藏びく／＼して居て」 鹿「若旦那斗りぢやうさ
 やようさだからに物一ツぬかす奴がない何時もは弟がお供する故からは今日が始めハテ
 扱廓といふものはとんだつがもないものだわい○夫のさうと若旦那が今宵につゞけるお身
 の大事たつた今迄詮議の工夫にお心を苦しめてムつたに爰の敷居を越すやいな願げ／＼と
 は何の事だ是もやつぱり「ト狐の眞似する」 しけり「アイ」合点でムんすわいなア「ト奥
 へ出て表へ出ようとするを」 鹿「ア、コレ」お子僧／＼しけり「お前は今日のかつさん 鹿
 ナ、ゑい子だのおらが頼む事が有るコリヤ」ト叩く」 しけり「ろんなら太夫さんを 鹿「身共
 だといふまいぞ しけり「アイ」ト奥へ這入る」 葛城「わしに逢たいと誰さんじやぞいなア
 「ト奥へ出て」 葛「お前は鹿藏さん山三さんもムんしたかへ 鹿「若旦那はムつたでもなしム
 らぬでもなし 葛「何の事じやぞいなアろうして見りや急度した形りで 鹿「太夫殿身共がコ
 ャ着付た所は適れ廓の大尽と君に思ひは有馬の松上藤にまかれて寐と／＼ムるしよんがへ

「ト葛城逃廻るか宮出て鹿藏を突廻す」鹿「ヤアコリヤ仲居のか宮 お宮鹿藏さんか前あじをやらしやんすな 葛「宮とんアノ鹿藏面めがなア お宮吞込んで居るわいなア鹿藏さん最前うら何して居やしやんした 鹿「サアおれは 宮「君に思ひは有馬の松よ 鹿「ア、なさけな い 宮「藤にまかれて寐とくくムるしよんがへ 鹿「ア、ゆるせく」ト上手の中二階へ逃込ひ障子引抜く内に伴左衛門 衣装羽織に改め鹿藏が手を捕らへ」伴「武士たる者の座敷へ踏ん込み何とする 鹿「ヤアこなたこ」ト伴左衛門夫成りに下りて」伴「不禮致さば手は見せぬぞ 鹿「コリヤたまらぬ」ト逃て這入る」葛「本に關さんよう出て下さんしたなア 伴「様々の者が入込じてな」ト燕一羽飛んで来て松の木へ留る」宮「アレ可愛らしいつばくらが」ト又一羽来て留る」葛「アレ又一羽来たわいなア 伴「誠に○花のみか月も見ていねつばくらめ○どの蘆風が發句秋風と諸共に故郷へ歸るつばくらめ一羽ならず番ひ迄扱は友におくれたのかハテ鹿相を小鳥めじやなア 葛「申關さんあの鳥があのかの様にして居るがありややつぱり女夫かへ 伴「凡そ生とせ生るもの陰陽夫婦のかたらひ知らぬといふ者が有うか 宮「人に譬へて見ようなら雄ノ鳥は關大尽さんの様なもの又雌ノ鳥は太夫さんナア申 伴「サアレば 葛「アレあの雄ノ鳥めが負惜みがつよいので何ぼうでも雌ノ鳥の傍へ寄りくさらぬエ、あた憎てらしいつばくらめが」ト伴左衛門溜息つくつばめ一所になり手水鉢の水を呑む」宮「ソレ

鳥が一所に寄たぞへ 葛「本になア」ト見に行振にて伴左衛門が傍へ寄り上よりじつと顔を
見る伴左衛門うらすこおし」葛「チ、辛氣」ト下に居り」葛「是いなア關さん私しや燕で心の悟りが開けたわいなア 伴「そりや何と開けた 葛「サア思ふ人いやと女子の罪深く殊に廊で育つ身ははりと意氣地にあらまれて心に斯うと思ふて居ても態とつれなうもてなすも殿御にはりを持たさうと手管を盡して居る内に心強い女子じやとツイ秋風の立に付けあの燕の様」ト一羽の燕飛去る」葛「ふいと飛んでいおしやんした跡では是ならどうに得心したらよかつたものと恨んでもやめめ鳥の只うろく立端に迷ふ濡燈同然じやに因て何も角もよう得心がいたわいなア 葛「スリヤ是迄様々を盡した念が届いた故 葛「お心にはだされて 伴「靡いて呉る所存じや迄 葛「アイおア 伴「エ、忝いといはせて置て 宮「笑ふでなとおつしやるので有うがろりやあんまりあなたの廻り氣 葛「本にあた憎てらしい 伴「ハ、ハ、花盗人は香に顯はれると何程口利口に言ひまけても是迄口説けども承引せぬ葛城太夫に今宵の○滅多には吞込まぬ」ト葛城さし櫛をぬいて」葛「神代より傳はりし湯津の妻櫛つまごめに髪飾りの櫛笄は姫御せの表道具お侍様の太刀刀此世にあらゆる神佛を誓ひにかけた私が金打」ト櫛を折らうとする」伴「待て聊爾致すな 葛「金打を止めさしやんすからは 伴「疑ひ時た 葛「エ、 伴「何にもいはぬ忝い」ト櫛をさいてやる内にて」 葛「ん、いこふ座がめいつ

て来た何と見立盡しはとう有らう 仲居皆々「コリヤようらふわいなア お宮」申々お客さん日頃の懸路に太夫様から御持参とは有難うて結構で伽羅で作つた佛も同然幸ひ二階の小座敷で「ト葛城伴左衛門が手を取り」葛「サア關さんムんせ」ト兩人上手の中二階へ這入るか宮奥へ這入る橋掛りも歌之助かりう相の山の拵へにて胡弓三味線と引乍ら出て歌一くさり有ると山三二階より追取刀にて出て」山「どう思ひ返して見ても丁簡ならぬいつを踏ん込み」ト駆込うとする下手の中二階を明て鹿藏此体を見て下りやうとする山三急度留る鹿藏叩へる」山「アイヤ」葛城に限り餘もや不心底の有らう様もなし頼み置たる一大事仕おしせん爲の手管で有らうよ、」ト又相の山に掛る」山「只の時さへ相の山聞けば哀れで引入る様な通れ」〇七人の子はなす共女に肌をゆるすなど況んや是は君傾城若しや大事を敵方へ洩らして」ト刀を引さげ」山「山三程の武士が女を頼みに賣の詮議本意を遂げねば末代迄尸の耻辱コリヤ此儘又は過されぬわいな」ト上手の二階の内にて」葛「關さん離座敷でサア寐ようムんせいなア」ト山三駆込うとする歌之助かりう編笠を取りツカ」ト這入り山三を急度止め」歌之助「まつた おりう待しやんせ山三さん私でムんす 歌「狩野歌之助でムる 山「藤浪が妹かりう 入り」アイ 山「お身は狩野歌之助 歌「遺恨の様子と存せねども 入り」お前は大切なお身ではムんせんかいなア 山「レテ兩人は何故爰へ 歌「桂之助様の密事の御内意

山「御朱印詮議の 歌「姿をやつし態々是へ 入り」歌之助様をお頼み申わさ」参り升たのはいつぞや志賀の花見の折から」ト耻のしきこまし」 入り」心の内を推量被成て下され升せいなア 山「誠に其時は酒興の上フトした戯れ其後お家の騒動よろなたの事はハッ」とイヤサ忘れはせねと思はぬなをさり 歌「レテ御朱印の手掛りは 山「荒僧は相知れたが委細の事は後刻密に 歌「然らば拙者は奥へ参つて相待申さう 山「お柳殿も歌之助殿と御一所に 入り」奥へ往て何角の咄しを仕升せうわいなア 歌「山三殿後刻 入り」サア参り升せう」ト兩人奥へ這入る内にて」泥助「二階も窮屈にムる 蟹藏「表座敷へ所を替へ升せうか 雲六「何様夫もよくムる酒肴を運べ」 仲居皆々「合点じやわいなア」ト奥へ雁入泥助蟹藏雲六仲居皆々太鼓持付添ひ出る」雁八「お身は名古屋山三ではないか 山「古傍輩の犬上雁八土子泥助笹野蟹藏久し振りの対面 泥「馬鹿者の桂之助を主に持たお蔭にて我々迄斯く浪人 蟹「以前はお家老の御子息にもせよ浪人すれば隔てはない 雲「幸ひ一盃下されうか 雁「そりや何をいはつしやる山三殿は元が自身我々と同席するお身柄でムらぬ牛は牛連れ先一献イヤ山三殿御免被成い仲居共サ、つげ」 泥「雁八殿の御意ではムれど廊の座敷は無禮講 蟹「左様」金銀を澤山に蒔散らす者が大尽 雲「金がなげねば二合半のもつそふ奴にも劣るといふもの 仲居皆々「左様じやわいなア 雲「玉」關さんの御連中は此様に揃ひ迄仕て下さんすれば廊での

大尽様じやわいなア。三「お玉さん其様にはいやるな帯さんからも此様に簪を下されたじや
 さいかいさア。おもん「まだ今宵の御祝儀に揃を追付呉服屋さんが持てお出るげな。お雛「最
 前宮さんが噂して居たじやないかいなア。順八「イヤ申帯さんどうぞ其揃が早う着服致した
 うムり升る。神八「取得ぬ事は不定りじや早う呉服屋殿が来て呉んかしらん。ト橋掛りより
 呉服屋十左衛門出て来て。ト「オ、旦那夫にお出被成升るか。山「十左衛門太義。ト「古
 渡の八丈島廿五反島柄が揃ひ兼升て大きに骨を折升てムり升る。トかはこを引寄せ。ト「奴
 様の御差圖で杉原で包み水引も掛けて参り升てムり升る。山「夫はいかひ世話で有た猿次郎
 皆の者へ遣はせ。猿「畏てムり升。彌八「ヤア待ては甘露のひよりあれじや。万八「揃ひが澤山
 有難い。先私から。猿「よくはしがる奴だらぬには跡で呉る。万「悪い受なア。ト猿次郎取
 て仲居太鼓持へやる。もん「帯さん重ね。皆々「お有難う存じ升る。山「イヤ禮受る程の事
 でもない。ト旦那夜も更升れば代金を頂き升て早う歸りたうムり升る。山「成程其儀は○明
 朝持せ遣はすで有らう。トイヤ私方は前々々現金賣がしにせでムり升ればどうぞ只今。猿「
 コリヤ。ト十左衛門僅一夜の事だから。ト一夜は愚か半時でも延引升せぬが是迄の仕來り
 猿「サアそこをお手前の呑込み。ト「エ、しつこい成り升せぬわい。ト橋掛り香具屋小兵衛時
 計屋若狭出て来て。若狭「いま。しつこい手足を引す事じや。小兵衛「見付次第取らにや成らぬ

ト門口へ来て。若「御免被成升せ。ト旦那最前の時計の金子。小「管の代金。兩人「貰ふて歸
 りたうムり升る。山「猿次郎彼等に金子を遣はせ。猿「ろりや何を御意被成る。私一錢も持合
 遣は。小「ないでは済ぬ現金の應對。若「晝くら今迄待つたさへ餘ッ程思にさせて居るのじや
 エロヤやり事に掛けたのじや。猿「素町人の分として法外の雑言今一言いつて見よ手は見
 せぬぞ。若「何じや。手は見いでも金が見たいわいの。猿「サア其金は。小「ないかそんなら
 代呂物取戻していぬる分見りや爰の仲居衆がさいて居るあの簪。若「此様な大膽な事する侍
 めどうで時計も内には有るまい。○四十三両の方にたらぬければ此わんほうを。ト若狭はぎ
 に掛る。山「不禮の素町人扣へて居らう。若「其おどしこはい事はないぞ脱いで仕まへ。ト
 ト着物をぬがせる。仲居皆々「コリヤ又あんまり。ト寄るを突退け小兵衛も皆々の簪を取る
 猿次郎看板を脱いでそつと山三に着せる。若「帯さんコリヤアアどうでムんすぞいなア。ト
 ト山三思案して居る。ト「聞けば聞程恐ろしいわろじや。ト小兵衛若狭は簪を十左衛門の反
 物を取戻して。ト「畢竟代呂物を取り戻したればこそ悪ういたら首道具。三人「ヤレ恐ろしい
 じや。ト三人橋掛りへ這入る。猿「何れも御らうじたかいかに貧苦にせさればとて淺間しい
 根性たなア。源「佐々木家の家老名古屋山三共いはる。侍が。素町人共に悪口せられ口惜し
 うは思はぬか。雲「さのみ無念よもムるまい侍の魂はどうに飛でムる夫に我々と同じ様に廓

で遊びは石龜のじだんだ 雁「大方きやつめはすつばん侍とかな申すでムらう 三人ハハハ、
 、雁「是はいかな扣へてムれハハ」ト山三が傍へ行き」雁「山三殿を氣の毒にムる全体金子
 拂底さらば身共杯に無心をいはつしやるがよい浪人な致してもお手前達の様に金銀に不自
 由は仕らぬ門に立つ鉢坊主にくれたと思ふて五十金や百兩は用達申さうが承はれば朱印の
 盜賊密に詮議召るゝ由夫に之証據でも有る義かお餘もや証據は有るまい此席につらなる者
 は潔白成る誠の武士お手前の様にかたりはせないイヤヤ盗人根性さげる者は一人もかりな
 いぞ」ト猿次郎無念のこゝしにて立かゝらうとするを山三留て居る」雁「コリヤハハ土でつ
 くなた素野郎め何びこハハ」さらすのだうぬが主の街りだぞ○イヤ藝者共生きた獄門見た事
 が有るか 太鼓持四人「見た事はムリ升せぬ 雁「見せてやらう」ト扇にて山三が顔を突上げ」
 雁「追付此素頭が栗田口で板に乗り齋鳥の餌食になるハテ氣の毒千万ハハ、ハ、願「イヤモが
 もへんしも折れ升た 袖「今迄貰ふたお花もいがんでわせたのでないか 願「かゝり合に成ら
 うかと案じ升た 五「帯さんお前は恐しいお方じやなア 雁「斯様な席に長居致し災難を受け
 うも知れぬ所をかへて呑直さうではムらぬか 雁「夫がよくムらう 雁「コリヤ山三何國へ成
 り共高飛を致すがよい此邊をうろハハ致して高手小手にメ上られ死に耻を晒すなよ 皆々
 サア行のしやんせいなア」ト皆々奥へ這入る」猿「さうだ」ト駈込うとする」山「さて 猿「イ

ヤ口惜うてこたへられ升せぬじや又因て 山「おのれ斗りが口惜うて身共は無念に有るまい
 か韓信が市人の股をくいるも辛抱じやわやい 猿「エ、山「コリヤ」ト叫く」猿「すりや某は
 山「早く行け」ハッ」ト向ふへ走り這入る鹿藏奥方出て」鹿「サ、若旦那お出かし被成れた能
 く御堪忍被成たなア」ト山三鹿藏が首筋を取り引付け扇にて打すへる」鹿「サ、御尤だハハ
 が是には段々 山「どこへ言譯身が名染の女に不義言かけし人外め○七生迄の勘當だ 鹿「エ
 、山「詞かはすも胸が悪い」ト花道中程迄走り行く鹿藏付て行き袖を扣へ」鹿「スリヤ矢張寫
 城殿に 山「迷ふてゐるわい」ト向ふへ這入る」鹿「若旦那大事を抱へたお身の上太夫殿の色
 に迷ひ若し過ちも有うかと思ひ附た敵役も皆あなたが御大切から夫に御勘當とはあんまり
 だお胴欲でごわり升わい」ト泣落す橋掛り右左手屋布風呂敷をかたげ出て」古手屋「どうぞ
 鹿藏に逢たいものじやがサ、鹿藏殿爰に居るかこなたはマア鳥渡じやといふて店にある
 衣装羽織コレこねるわいの戻して下されハハ」ト鹿藏是に構はず思案のこなし古手屋は
 鹿藏が帯を引ほささ」古「サアぬいだハハ 鹿「勝手にさらせ」ト蹴飛を古手屋は衣装を取り
 走り這入る」鹿「どうハハ丸でむいでうせた此様な事は構はないがおらが勘當どの様に申
 譯をいつたとして詮議お聞入は有るまい」トふんぞしに刀をさし」鹿「いつそこん腹かつさば
 いて此魂をお目に掛けたら不便な事だと御勘當のゆるる事も有うさうだ○イヤハハおらが

腹切た其跡で言譯をしてくれる者はなし腹切れば犬死死ぬにも死ねぬかコリヤア何たる事だんべい〔ト奥方〕しけりアイ〔ト振袖の禿のいせうを持出て後々鹿藏にさせ奥へ這入る鹿藏氣の付かぬこかし〕鹿、どう思案仕直しても爰で死ぬるは損だ〔トうか／＼袖を通し〕鹿、若旦那にはついで申譯をしてか聞入れない時は〔ト尻をからげうとして我身を見て〕鹿、コリヤとんだ形りだ儘よ〔ト向ふへ走り這入る返し〕

造物離座敷の体床の間に掛物花生あり刀掛は大小掛有り利休行燈に火を灯し手水鉢有り六枚屏風引廻はしありやわらか成る相方にて道具留る〔ト屏風引明け葛城寮間着の形り伴左衛門前帯にて居て両人手を洗ひ〕鹿、是で私も落付升たわいなア 伴、身共連も同じ事心に掛る山の端もなしア、よい名月で有たわい 鹿、關さん必らず變つて下さんすあへ 伴、何の變つてよいものかいのう〔ト葛城伴左衛門が懐へ手を入れ〕鹿、お前の肌にて居やしやんす物と何でムんすぞへ 伴、ヤ○コリヤ守りじや 鹿、其守り私に下さんせいなア〔ト懐へ手を入朱印を引出す伴左衛門留め〕 伴、サア望ならやりもせうが今といふては 鹿、そりや又なせにへ 伴、サ夫は○そちが誠が知れぬゆへ 鹿、アノ是程に打解けても 伴、身が女房に成るといふ儲な証據を見た上で 鹿、私が心底見せた上はお前の誠も見にやならぬぞへ 伴、ハアそちが眞實さへ顯はれたら〔ト葛城鏡臺の鏡を取て熊野の午王を出してひるげ〕 鹿、女子

のたしなみ熊野の午王一生お前お外の殿御と肌觸れぬといふ誓ひの起証〔ト脇差を抜いて午王の上で指を切る〕 伴、是は又短慮千萬痛みはせぬかく 鹿、イエ／＼大事ムんせぬ私が心底をお目に掛けた上からは 伴、いふにや及ぶ身共連も武士の誓紙〔ト刀にて左の腕を引く血汐滴り兩人の血汐一つに成る〕 伴、ヤアアレ／＼ 鹿、血汐が一つによるわいなア 伴、ハテ心得ぬ都て血汐の混するは親子兄弟骨肉のしるし 鹿、私が指の此のりと 伴、身共ががいなの出血と 伴、合体せしめ 鹿、ろんならお前と 伴、其方とは 二人、ヤ、ヤ、〔ト大恟り〕 伴、コリヤ葛城ろちが所持せし其守りは〔ト葛城泣て居る故手を入守りを出し見て〕 伴、コリヤコレ覺へある二重鶴の古金襴 鹿、内に入たる短冊に小式部が歌の上の句 伴、子をすつる藪のなけれど深みどり我未た若年の砌り手廻はりの女に手を掛け計らすも懐胎父道犬が怒りを恐れ密に知るべの方にて出生きたる一人の女子後日の証據と紅梅の短冊に此上の句を認め二重鶴の守に入れ湖水の邊りに捨置しを思ひ出せば十七年○コリヤ葛城此守りはそちが手にどういふ事を入たるぞ〔ト葛城胸にせまりしこをにして泣き居る〕 伴、泣て居ては事が濟まぬ早く様子をいつて聞せよ 鹿、其守りは私が産みのおいさんのお袋でムんすわいなア 伴、何がどうした 鹿、藪の上から佐々木の身内佐々良三八といふお人に拾はれて眞實の親と思ふて暮す内様子有て此里へ勤奉公に来る時初めて聞た此身の素性捨子の因縁箇の

守りせんなら矢張眞實の 伴「ユリヤいつろやくたいじやわい 葛「さうじや南無阿彌陀佛」
ト自害せうとする」 伴「ユリヤ」待てく尤だがたつた一言いふて聞す事が有るマア待
てやい」ト刀をもぎ取る」 葛「わしや此世から畜生に成たかいなア」ト伴左衛門行燈の火を
吹けし」 伴「明りが有ては面目なくて顔が合されぬ」娘よく無事で居てくれなア世の因
果も多のらうが又此様な淺間敷因果が外に有るか焼野のさす夜の鶴子を憐むハ親の習ひ
身共は夫に引かへて生れ落ると氣強う捨他人の手しはに人と成り其上つらい師の奉公實の
母はとくに身まかり天が下に親一人子一人間ひ音つれもすべかりしを只其儘に打過ぎて巡
りくして今月今宵いかな身共も五体が碎け四十四の骨々迄もさかるゝ様な是も前生の報ひ
と諦らめこらへて呉よ 葛「勿体ない事仰有て下さり升せ私故にとゝさん」○イヤあなれ迄同
じ因果に引入れ升たひよんな守りを持て居て是が何と成るものでいなアいつろ名乗り合す
んば此苦しみは見まいわいなア 伴「親子と名乗り合すんば身共を討て一萬町の御朱印を奪
ひ取る所存で有らうがな 葛「エ、 伴「ホ、出かした」○とサアいふにははれぬ今宵のしだら
一旦身共が手に入る賢」ト朱印を出して」 伴「假令甲が舍利又成ても人手に渡さぬ武士の意
地併しくらがり鈍な者何者ぞが某が透を伺ひ奪取られては」ト葛城が手に持たして」 伴「
南無三油斷大敵じやなア 葛「エ、忝いんなら山左衛門様の仇といふは 伴「外でもない此

伴「左衛門」ト葛城悔りして又自害せうとする」 伴「ユリヤ今相果なば其朱印は何者が手渡し
致すぞ 葛「サア夫は 伴「命の捨やう早い」トか宮手燭持出て」 葛「葛城さん」ト差出
す伴左衛門叩き落して」 伴「ハレ烈しい風の」ト此引張宜敷返し

遣物淺黄幕草土手松原稻村踊り三味線にて道具留る」ト向ふと歌之助かりう連立出て」リウ
「申歌之助様さうぞ山三様に逢して下さり升せいなア 歌之助「身共連もか目に掛り何か委敷
お物語り」ト猿次郎走り出」 猿次郎「歌之助様かりう殿ではムらぬか 歌「猿次郎シテ山三殿
は 猿「只今爰迄お供致し御用の筋にて引返し升たシテ御両所は 歌「只今お宅へ参る所 猿
然らばお供致し升せう」ト三人橋掛りへ這入る向ふと山三着流し大小江戸頭巾ふらり丁ち
んを竹に付思案仕ながら出る跡を鹿藏見へ隠れに付けて出ると上手の上林と習たる提燈を
駕に付け出る山三急度成る駕花道の付際へくるツカ」ト寄て棒鼻を突き戻し駕の垂を引
上る雲六稻妻の衣髪羽織にて乗て居る山三抜打に切付る駕昇は途て這入る雲六扱合せ立廻
り様々有つてド、雲六を切り倒し首をかいて」 山「長谷部の雲六め巻物の盜賊」ト又駕一丁
居て来る山三垂れでしに刀突込む蟹藏駕をこけ出る駕昇途て這入る立廻り色々有てト、見
事に切り止めを刺す血刀抜取るを見て鹿藏手拭にて刀のりをふきしまいどうぞ勘當をゆ
るし下されいといふ心いさ山三成らぬといふこなし又駕昇て出る山三切付る駕昇途て這入

る泥助抜刀にてぬつと出る立廻つて切倒し首をのく。山「土子泥助敵のかたう人」ト又駕昇て出る山三すつと寄て垂引上げ刀突込む雁八後ろへひらりと抜け駕を小楯よ取る駕昇逃て這入る兩人烈しき立廻り有てド、切り倒し首をかく鹿藏此内心遣ひのこなし右の首を邊りへはふる白犬此首をくはへ向ふへ這入る山三上手を急度見込む返し

造物島原一面の扉大門口柳の大木釣枝片脇に往來安全と書たる燈籠火を灯し有る靜成る合方にて道具留る「ト大門の内方駕に上林と書た提燈を釣り昇て出る山三ツカ」と寄て」山「是ころ誠の伴左衛門覺悟」ト垂を引上ると葛城稻妻の衣裝羽織にて乗て居る駕昇逃て這入る葛城出ようとする所を首を討つ此首御朱印をくはへ居る橋掛り大門の内方町人大勢九條揚屋町上の町中の町下の町坏と書たる弓張提燈棒を持て出て」大勢「そりや人殺しじや」トおして来るを鹿藏抜身をひらりと見せる皆々逃るを鹿藏橋掛りへ追ふて這入る山三「幕目の草履を懐中へ出し件の首を踏んとして合点の行ぬこなしにて邊り見廻し燈籠の火を取て来て首を見悔りして口よくはへ居る御朱印を取て見て大きに驚き葛城の羽織を拾ひ裏に何か書有る故ひるげ見て」山「落る涙に薄らぐ墨を幾度かくすりにごし切れ行筆の命毛を暫しといめて書殘しる」數ならぬ身に打明けて一大事の御頼み受合申す始めよ不破殿に身を任せて彼一品を取り返し上げ申譯には命を捨擲を立申さんと覺悟を兼て極め候

去るにても唐倭に又ためしなき因果の巡り來て不破殿は此身の爲ま血を分け玉ひしと、様にて御座候夫とも知らず御身の爲に肌身を穢し候事此世から成る畜生道犬猫にも劣つたる身の成果の淺間しと未來迄も恐ろしく是のみ迷ひの種と悲しき御推量下され候仇敵の血筋といひ殊には斯様の淺間しい事御知らせあらば御愛想も盡果御憎しみも嘸あらんといつろく悲しく思ひ候此世計りの思ひ出はるもじ様のお手に掛り相果候事は一ツは御持敷存じ候今端の際の御願ひ何れ助からぬ命乍らも責て一度は父上を御見遁し玉はらば千部万部の御回向有難く身のみ願ひ上候南無阿彌陀佛く帶様參る葛城方○臂へにおふるいつ迄草のいつ迄も盡せぬちきりを思ひ切りてよ○スリヤ葛城が親といふは不破伴左衛門現在血筋の父共知らず○チ、貞女とも賢女とも類ひ稀なるそちが心底命を捨てたばかりに御朱印は手に入り佐々木のお家はにて再興チ、出かしたなア「ト泣落す鹿藏走り出て」鹿「若旦那ヲ伴左衛門は山「コリヤ御朱印は手に入た又葛城は伴左衛門が娘故一度は見遁し吳よとの此書置 鹿「スリヤ葛城殿は山「不便な事をしたわいやい」ト此内伴左衛門葛城が首をそつと取て花道中程迄行き首を見て」伴「無残な死に顔 山「儘に不破伴左衛門」ト行くとするを鹿藏羽織の書置をきつと見せ 鹿「コレ申 山「よ、」ト山三さしむ伴左衛門向ふへ這入る鹿

藏之なし、宜敷拍子幕

演劇傾城品評林 大尾

明治廿七年十一月十日印刷
明治廿七年十一月十六日發行

(定價金拾貳錢)

版及發行所
權興權有

不許謄寫

大阪府東成郡東平野町大字南平野五百四十番屋敷著作者故 金澤龍玉相續人

大關シ十

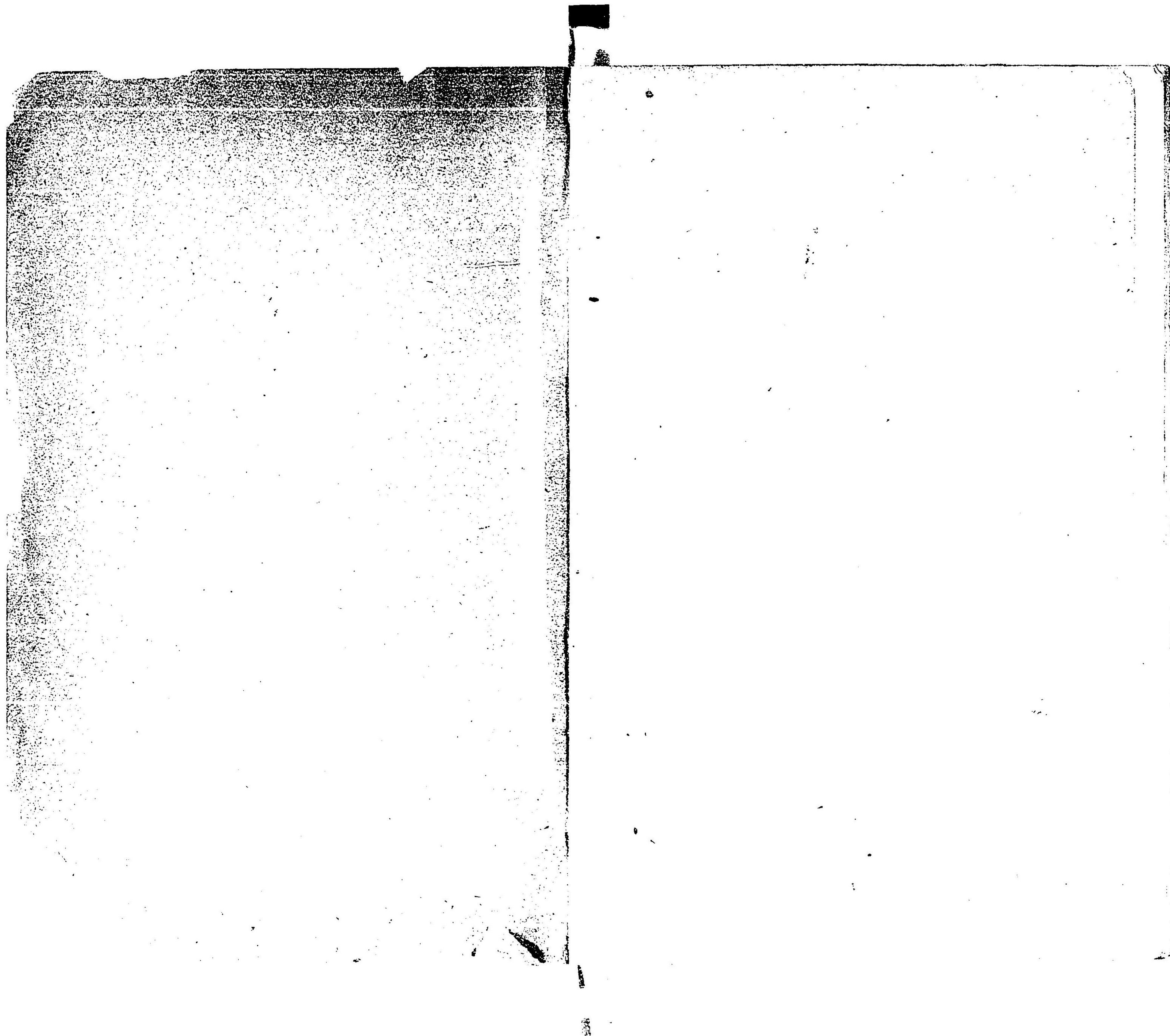
大阪府東區備後町四丁目四十番屋敷

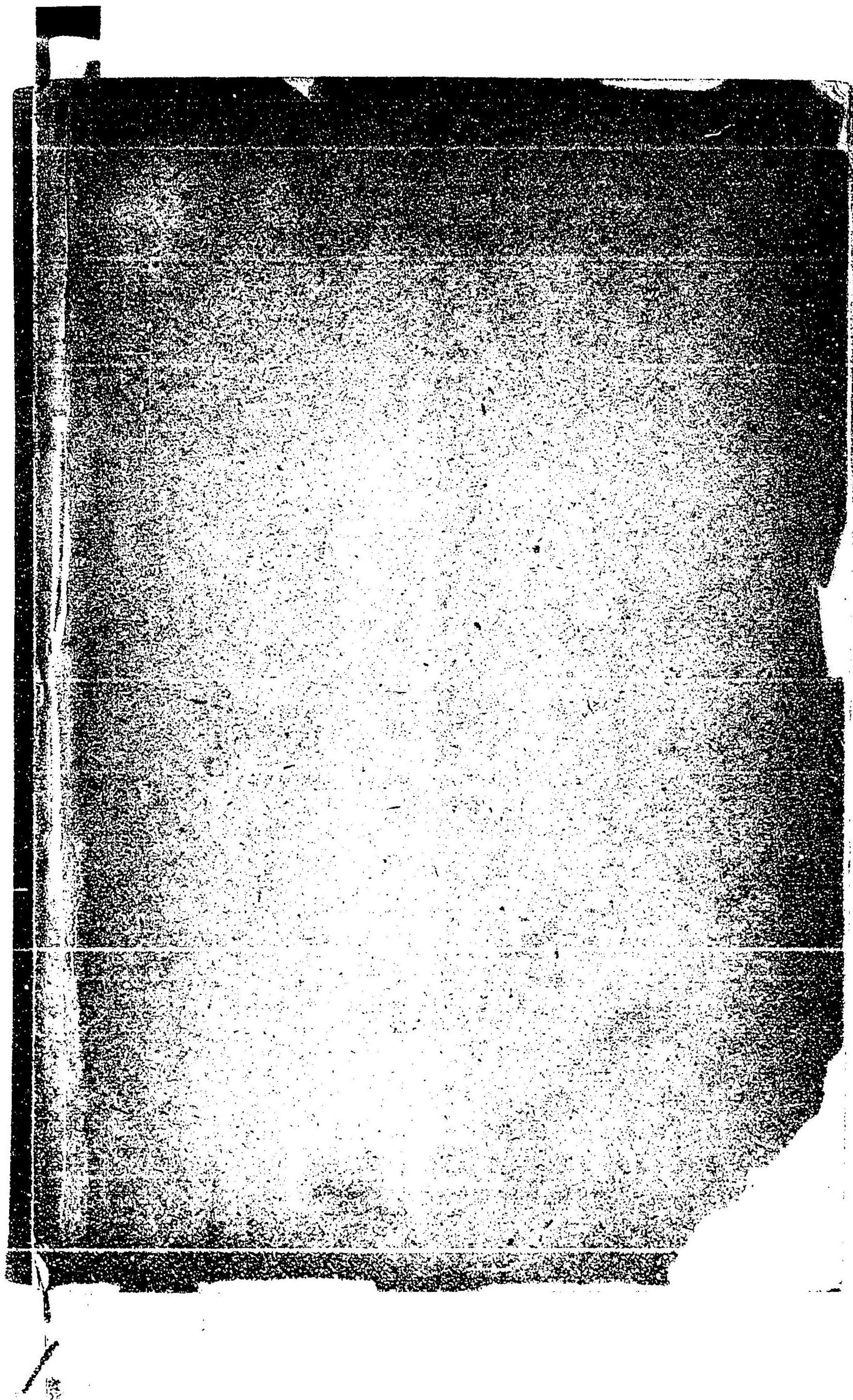
中西貞行

版權所有者
兼發行者

大阪府東區內本町橋詰町六十八番屋敷 周擴社

印刷者 前田菊松





特 11

623

088519-000-9

特 11-623

傾城品評林

金沢 竜玉 / 著

M27

DBJ-0176

